

R18
adult only

ペルソナ5
竜司*主人公
合同誌



コ ッ ち ゃ ん の 夢 魔 の ビ ミ ツ

kirimoto yuuji
& kokokisu





cover illustration : kirimotoyuuji

もくじ

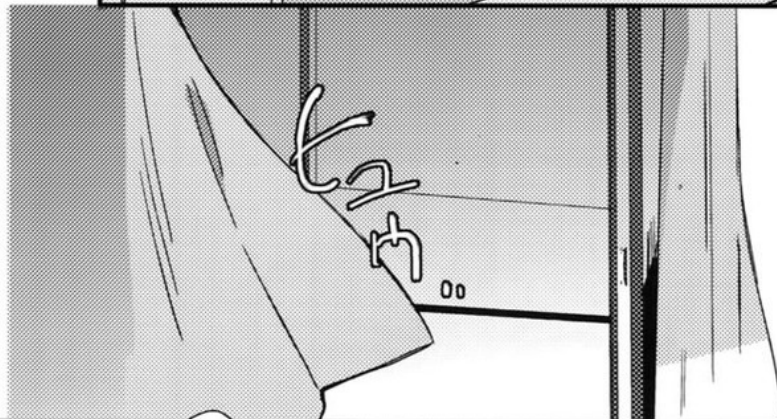
- 3P ヒミツの夢魔コップちゃん 桐下悠司
67P 小悪魔テンプレーション kokokisu
33/68P ゲストページ



ヒミツの夢魔コップちゃん♡

桐下悠司









？
お前が
見てたんじゃ
ないか

こういうオンナが
好みなんだろう？

は…？



いや服もそうだけど
羽根…っ？
ここの俺の部屋

夢！？
女警官モノで
抜こつて
そんで…



まあ…でも

ちょうど
間に合った
みたいだな

は？
うって
わ

なっ…なんなんだよ
マジで…

変質者!?

へえ

欲を
持てあましてる
割に…

随分
新規臭い
夢見てるな

!?

ゆっ
ユメ!?

ガッコウで
イジメられて
るのか?

認めて
貰えない?

居場所が
ない?

それで溜まって
るんだろ

今
見てただろ?

俺は夢に
入るから

っ…

いいよ

俺なら
発散して
やれる



やっぱり誰かから俺の事聞いて…

俺は…
からかってんのか!?

俺は…
何も…



…ッ

…JUN



からかって
ない



本気だ



…



うおあ

心配するな
俺はただ
食いにきた
だけだ



なっ
何を…



は!?
お前…
何いって…



オトコの
精気



夢魔は
これがシゴトで
生きる糧なんだ

力が…抜け…

俺にまかせて

ちゃんと
気持ちよく
してやるから

んだよ…
コイツの声…

変なトコに
響くっ…



うわ

?
違う所
舐めてほしい
のか?

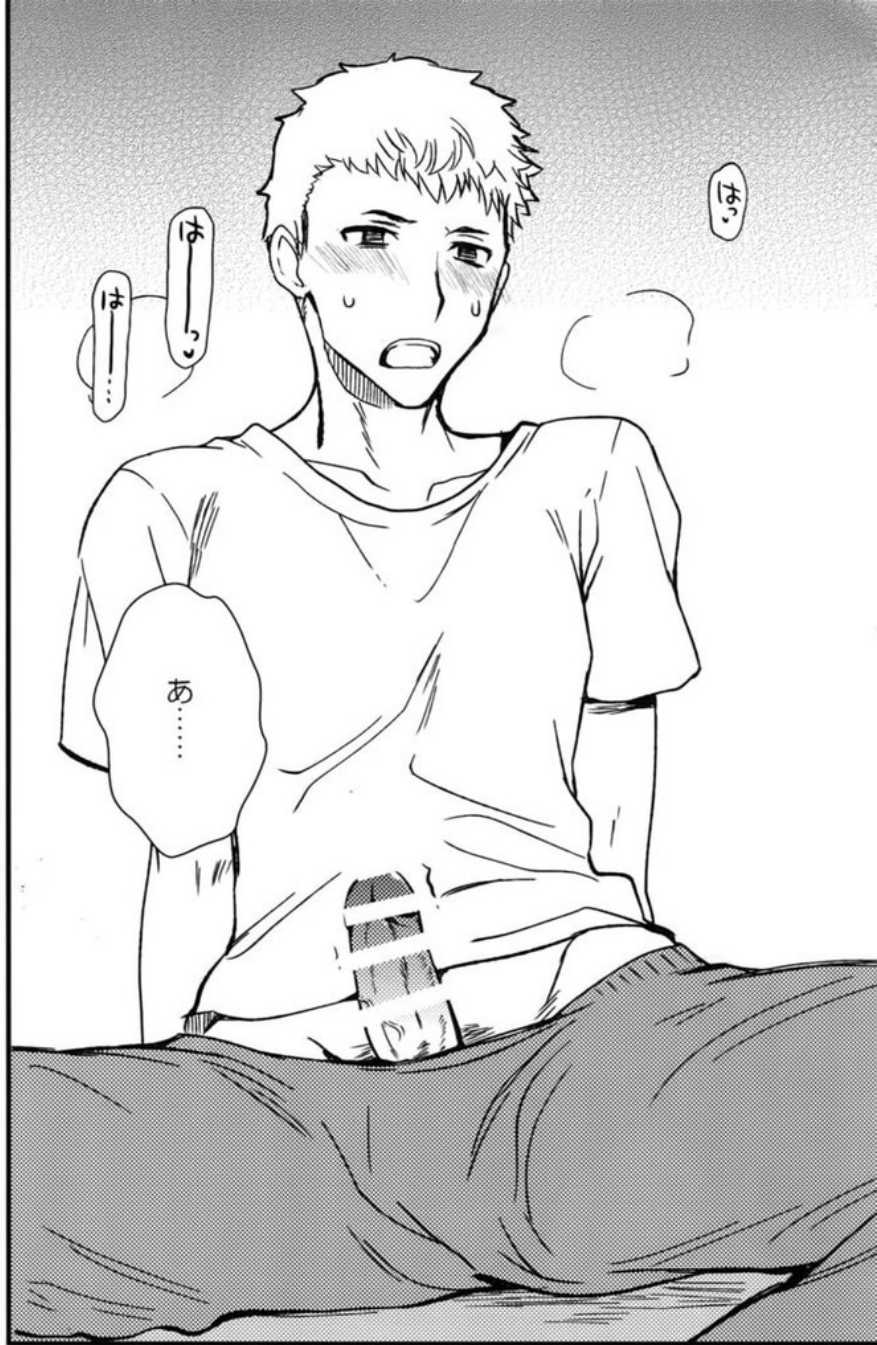
いって
ねえッ

ちよっ
マジで…

どっ舐めっ…













っ……♡
すげ……♡
チンポ
吸われる……っ

あ♡それ♡
ごりごりするっ♡
奥まで
くるっ♡



中……
射精して
いいのかよ……

っ♡
っ♡
っ♡
全部っ……♡
全部っ……♡

……っ



あーっ
あーっ
あーっ

あっ♡
あっ♡
りゅうじ♡
りゅうじ♡

あーっ♡
あーっ♡
あーっ♡
あーっ♡
あーっ♡

もー
射精そ…っ♡
っく…

は…
は…
は…

あ♡
ん♡
あ♡

射精してっ♡

全部
射精してっ…♡

いっく♡
いっく♡
いっく…♡





戴きすぎて
栄養過多だ…

えっ
……

栄……



何だよ
照れてるのか

は!?

照れて
ねえよっ

なんで
怒るん
だよ…



あのカッコは
お前の妄想に
合わせただけだ

でも効果
あったみたい
だな



俺の部屋
だし

だーっ
もー帰れよ

ん
気分は
よく
なったか?

スッキリは
…した
けど…



なんで俺
こいつと…

溜まってた
つつつても
限度が

…いやすげー
良かったけど…



良かった

気持ち
良かったらろ?

夢見は
良い方がいいから

俺一応
夢魔だし…







な
おっ...

かああ

今日から
よろしくな

竜司♡



俺は竜司の事
気に入ったぞ



あ

もう一回
マイとくか?

もー...
出ねえよ!!





夢魔くん

若い男の精気を吸って生きてる
サキュバスだよ。
色々あって竜司のことを気に入ってしまい、
今は竜司の家に居候しているよ。

夢魔くん!

ハトムギ

三島
三島だよ。

竜司

秀尽学園高校陸上部のエースだよ。
スケベなことに興味があるお年頃なので、
夢魔くんの誘惑になかなか勝てないみたい。

夢魔くんと竜司の部屋



夢魔くんとメイドルッキンパーティ





竜司♡♡♡

?
魔界?

前は
どこにいたの?

マカイって何県?

...



夢魔くんが転校してきた

竜司
どこか??

どこかで
見たような...

うっそ...
めっちゃイケメン
じゃない...?

ぞわっ

脚長い...

顔がいい...



おまっ

ガラッ

なんで学校にいんだよ!?



竜司!

遊びにきた!

このあとめちゃうくちゃ
質問攻めされた(竜司が)

ほあぁ

Mr



竜司

やたら目立つので
メガネもらった

腹減った

はあ〜!?
さっき食ったばっかだろ…

んー?

しゃーねえな…



もしかして
食事…?

うっわ
ペロチュウしてる…音やば…

舌の動き
エッロ…



ちゅ

ええええええええ!!



だ!大丈夫…
気にしないで続けて…

そうか

あ…
俺ちよつとトイレ…

おしまい



どうした? ミシマ
そんなじつと見て…



キリとせん
kokorisuzen
ありがとうございます
夢だコワイサコー!!
うんうん。

すき

すき

すき

寝ている竜司の
夢の中に入りこんで
エッチなことを
しちゃうぞ!!

畏だ祐介 吐き出せ———ッ!!!!!!
(寢言)



どんな夢だよ



エロ展開に持っていきづらい夢ばかり見る竜司 vs 欲求不満夢魔ちゃんファイッ!!



たっだいまあー…

おかえり

いや合宿
まじ疲れたわ…

地獄っつーか…
なげーわ…

オツカレ

つす

なんじゃこりゃ
クィ…

さわ



じっ

?



いや今日はまじ
ムリだかな…!

今日とられたら
ぶっ倒れる!!

夢魔のれんれんは
アレコレすることで
人間から精気を奪う
ことができるのだ!





すくにおかると
CIES





コッちゃん
夢魔
とミミの

persona5 ryuji*protagonist
Succubus-cop fanzine

コッパちゃん
と
夢魔の
ミミ

persona5 ryuji*protagonist
Succubus-cop fanzine

数日前までの竜司は、今までの彼の人生でも一、二を争う最低な時期を過ごしていた。

都内の私立学校に陸上の推薦で入学したのに、鴨志田と言う暴力体育教師の所為で脚を壊されて走れなくなった。しかも、その傷害事件は竜司が先に手を上げた事による正当防衛とみなされ、彼の所属していた陸上部は解体された。竜司は仲間達から私情に走った裏切り者扱いされて、竜司は学校内での居場所も目標も失ってしまった。

竜司が鴨志田に手を上げてしまったのは、その教師が彼の母親の事を侮辱したからだ。彼の母親は、父親と離婚した後、女手一つで竜司を育ててくれた立派な人である。その父親が母親と幼い自分に暴力を振るっていた期間が、竜司にとつてもう一つの最低な時期だが、そんな過去を忘れさせてくれるほど、母親は自分の為に尽くしてくれた。陸上に専念できたのも母親の助力あつての事だ。試合の度に、胸を張って自身の結果を伝える事が、竜司にとつては使命ですらあつた。それまで鴨志田が自分に何を言おうと、無意味な体罰を与えようと耐えられたが、竜司はたった一人の家族である母親を貶される事には耐えられなかった。

陸上を出来ない身体にされ、学校内では誰からも遠巻きにされるようになった竜司だが、自分がこの状況に置かれてしまった事に対しての後悔はなかった。自分の正しいと思つた選択をしたのだから。あの時、鴨志田の垂れ流す母親への侮辱を聞き流していたら、それこそ一生後悔をしていたはずだ。

竜司は今でも、その時の自分の信じた正義を胸に抱いていた。

明日も学校だと思っただけで、早く寝る気が失せてくる。竜司はベッドに潜り込んだまま、スマホを弄って無為な時間を過ごしていた。

少しは勉強でもしたらどうだ、と母親には言われているが、走ってばかりの学生時代を過ごしてきたので、勉強の仕方が分からない。一応進学校なので、勉強ができないと教師に五月蠅く言われるのだが、そんなの今更だ。秀尽には陸上の推薦で入学していて、学力を認められた事などない。

友人とは疎遠になつていたので、SNSのやり取りは殆どない。髪を染めてから竜司の素行が悪くなつた事を察し、教師たちも腫れもの扱いしている。

知つても知らなくてもいい情報ばかりが乗っているネット記事を眺めたり、惰性でソシヤゲをプレイしたりしている内に、睡眠時間は徐々に削られていった。

ふと時間を確かめてみると、夜の十二時を過ぎている。もう寝るか、と思つたが、スマホの電源を落とし、目を瞑つた途端、竜司は身体がざわつくのを感じた。

生理現象だと言う事は分かっているが、最近あつた色んな出来事を鑑みると、彼との因果関係を疑わずに入られない。何せ、彼は人知を超えた不思議な力を持っている。人の身体を動けなくしたり、節操なく発情させたり、人の精気とやらを吸って元気になつたり。

竜司は部屋の中を隅々まで確認して、彼がこの場にはいない事を確認した。もしも行為に耽つている姿を彼に見つかったら、これは好都合とまた精気を吸われる羽目になる。付き合つてもいない、男の彼と身体を重ねるなど、竜

司の常識の範囲外の行動だ。竜司はこれ以上、彼とのただれた関係をだらだらと続けたくはなかった。

自分が部屋に一人きりであると確かめてから、竜司は直ぐにスマホの電源を入れ直し、インターネットブラウザを立ち上げた。イヤホンプラグを差し込みながら思いついた卑猥な単語を片っ端から検索してみると、未成年の竜司でも簡単に女の裸の動画にありつける。日常生活では女の胸の赤い部分さえ目にする事はないのに、画面の彼女たちは脚の間や男と繋がっている姿さえ、煽情的な笑みと共に晒していた。

直ぐに頭も下半身も画面の女の虜になり、竜司は手をズボンの中に潜り込ませて、欲を発散させようとした。下着がまだ汚れていなかったのは幸いだと言う位、熱を持って硬くなっている。

茎を掴み、指ですりすりとお愛撫を始めた瞬間だった。ベッドに横たわる竜司の視界を、大きな飛膜の羽が覆う。

「うおっ！」

慌ててイヤフォンを外し、ズボンから手を抜いて身を起こした。

人間とは思えない美しい顔をした青年が、蝙蝠の様な羽を部屋一杯に拡げている。黒いジャケットに長く癖のある黒髪、肘まである黒の皮手袋と、ヒールのついた黒いロングブーツ。全身を漆黒で包んでいる彼だが、瞳だけは血の様に真っ赤だ。肩甲骨の位置から生えた羽とその瞳だけが、彼が人間ではないことを示していた。

「おい、竜司。また俺に隠れてマスクかこうとしてるだろ」

白い肌に細い喉元、強気そうに目尻の上があった大きな目は長い睫毛で覆われていて、鼻は眉間からすっと筋が通っている。いつもは上品に口角の上

っている赤いルーージュで色づいた唇が、今は竜司の不貞に腹を立ててへの字に曲がっていた。年頃は竜司と同じくらいで、体つきもちゃんと男なのに、顔には紫のアイシャドウを乗せて、服装もタイトな黒のスカートで、まるで女のような恰好をしている。しかしながら、それが不釣り合いだと思わせなだけの美貌を、彼は兼ね備えていた。

「なっ、おいジョーカー、どこから入って来たんだよ！」

ジョーカーと呼ばれた彼こそが、竜司とただれた関係を築き上げている張本人だ。身体が男であるにも関わらず、彼は夢魔であり、竜司と性交をする事で彼から精気を吸い取っていた。

竜司の動揺を嘲笑うかのように、ジョーカーは腕を組みながらベランダを指さした。

「鍵、開いてたぞ？俺が入ってきた事にも気付かないくらい夢中になってたみたいだな」

その言葉を聞いて竜司は思わず天を仰いだ。あれほど部屋の中に彼がいなか警戒していたのに、基本的な部分の注意を怠ってしまった自分に自分で呆れてしまう。

竜司は顔を赤らめながらジョーカーへと鋭い視線を送った。

「お前、また俺と寝るつもりで来たんじゃないだろうな。まさか、これも魔法か？」

その問いかけに対してジョーカーは首を傾げている。

「まあ、腹が減ったからここに来たのは間違いないけど。魔法？スキルの事？だったら俺は何もしてないぞ」

竜司が何を言いたいのか察して、ジョーカーは帽子の鍰を掴み、含みのあ

る笑みを浮かべた。

「もしかして、竜司がエッチな気分になるのは、全部俺の所為だって言いたいのか？ 酷い言いがかりだ。俺は、お前が持て余してる精力を少し分けてもらってるだけなのに」

ジョーカーの瞳が一層艶めかしく輝き、竜司を真っ直ぐに射抜める。彼の艶めかしい双眸に見惚れていたら、一瞬の間に唇を奪われた。その途端、竜司は身体が岩になったかのように、指一本動かさなくなった。

先ほどまでの身体の火照りはジョーカーの仕業ではなかったのだと、竜司もようやく理解した。彼がスキルを使ってあの程度で済むはずがない。生理現象と、悪魔に身体を乗っ取られる違いを、竜司はまさまじと実感していた。

ジョーカーが人形遊びでもするようにして竜司をベッドに横たえさせ、彼のズボンを下着と一緒にずる、と脱がせた。彼の性器は既に熱を持ち、美味しそうに腫れ上がっている。ジョーカーは頬を紅潮させながら、舌なめずりをした。

「ん、今日はマリンカリンじゃないみたいだな」

初めて竜司と寝た時は、戸惑う彼をその気にさせる為、マリンカリンという相手を混乱させるスキルを使わなくてはならなかった。だが今日の彼は初めから臨戦態勢だ。わざわざ目を眩ませてやる必要などない。

ジョーカーは手袋を外して竜司の物を根元から先端までつうと撫で上げた。指先一つとっても、夢魔の彼は男を喜ばせる方法を熟知していて、竜司は堪らずに眉根を寄せて声を嘔み殺した。その反応を見て、ジョーカーが嬉しそうに微笑みを浮かべる。

「一緒に気持ち良くなるう」

竜司の性器を口に含み、ジョーカーは彼への愛撫を始めた。口紅で染められた唇が、自分の陰茎を包み込んで、上下に撫で擦っている。口の中では忙

しなく舌を動かして、敏感な裏側の筋を、優しく刺激してきていた。化粧をした男の悪魔に襲われているなど、耐えられない状況であるはずなのに、竜司は眼前で見せつけられる艶めかしい光景に頭がくらくらしてしまった。

ちゅば、と吸い付きながら陰茎を吐き出し、ジョーカーは竜司の物を愛おしそうに扱き上げた。彼の赤い瞳は情欲にのぼせ上っている。まるでご馳走のように性器を扱っている彼の姿は、竜司が先ほどまでスマホで見ていた動画でも、太刀打ちできないいやらしさだった。

「おいしい。やっぱ、竜司のが一番だ。早く、飲ませてくれ」

その一言を耳にして竜司が過剰に反応を返す。

「お前、やっぱ俺以外ともやってんのかよ……！」

「当たり前だろ。夢魔なんだから、精力を補充できなかったら腹が減る」

ジョーカーが再び竜司の物を舌を這わせて、事も無げに言った。

「でも、今はお前からしか精力を補充してない。相性が抜群に良いみたいだ。

他の男じゃもう満足できない」

可愛い顔で真っ直ぐにこちらを見つめてきて、まるで自分一途のような事を言うが、竜司はジョーカーの言葉を信じていなかった。彼にとっては人間の男など、ただの餌でしかないと知っていたからだ。もしも自分から精力が補給できなければ、彼はあっさりと他の男の元へと向かうはずだ。

熱を孕んだ竜司の物はこの上なく硬く熱くなっている。これ以上責め立てたら、耐えきれなくなって熱を吐き出してしまおう。ジョーカーは竜司の身体の状態を、まるで自分の手足の一部の様に把握していた。

びたりと愛撫を止めると、竜司が物欲しそうな目をこちらへ向けてくる。反応が分かりやすく可愛い。ジョーカーは竜司へと魔性の微笑みを投げかけてやった。ブーツと黒いストッキングを脱いで、彼の目の前で大きくスカートを持ち上げる。

やはり彼も男なので、竜司に負けずとも劣らない立派な物は、先端が臍を向く程硬く反り返っていた。女の恰好に男の性器と言う倒錯的な組み合わせは、何度見ても慣れる物ではない。だからこそ、普通の女の裸よりも、心をかき乱されるのだろうか。竜司は無意識にごくり、と生唾を呑み込んだ。

「中に直接注いでくれ。そっちの方が、吸収早いから」

ジョーカーは竜司の性器の上で膝を立てると、前戯もなしに竜司の物を自身の後ろの穴へと宛がった。普通の人間なら硬く窄まっているはずのそこが、入念に解されたかのように柔らかくなっている。性器の先端が触れただけで、竜司は彼の狭くて柔らかく温かい体内に擦られる快感を思い出し、身震いしてしまった。

「はっ、んん……」

少し苦しそうな、色っぽい声を上げながら、ジョーカーは竜司の物を全て腹の中に収めた。他の男よりも太い訳ではないが、竜司の物に中を擦られると、膝が砕けそうに気持ち良い。まだ吐精されてもいないのに、繋がっただけで飢えが癒されるのが分かった。こうやって重なる度、身体と心と魂の形が、彼とはびつたりなのだと思感する。

それまで指一本動かさなかったのに、途端に竜司の身体の硬直が解除された。急になんだ、と疑問符を浮かべる竜司へと、ジョーカーが甘えたように縫りつく。

耳に唇を寄せて、酔ってしまいそうに甘い香りを漂わせながら、ジョーカーは竜司の耳へと囁いた。

「竜司ので、滅茶苦茶にして欲しいな。俺、腹減ってるのもあるけど、久しぶりだから身体が疼いて……」

それまで意地だけで耐えていた竜司も、この彼の台詞には理性が敵わなかった。ようやく動かせるようになった身体を起こすと、ジョーカーをどきりとベッドに押し倒す。スカートを太腿の上まで捲り上げたまま、竜司は彼の中を掻き混ぜるように突き上げた。

いくら柔らかいとは言っても、彼の身体は男の物で、そこは性器を潤滑に受け入れる造りをしていない。引き抜く度に、褸と粘膜が未練がましく性器に絡みついてくる。腹の中の臍側にある性感帯を雁首に挟まれる度、ジョーカーは繋がっている部分を痙攣させた。その生き物のような蠢きが、性器全体を揉みしだいてきて、竜司は頭がぼうつとする程の快感を得てしまった。

「ひっ……、あっ、や……！竜司、はげ、し……！」

涙を浮かべながら大きな声で喘ぎ始めたジョーカーに気付く、竜司もはつと我に返る。

「馬鹿っ、声……！」

隣の部屋では母親が激務に疲れて眠っている。彼女がジョーカーの乱れた声に目を覚まし、扉を開きでもしたらどうなるか、竜司は想像もしたくなかった。

ジョーカーは竜司の取り乱す様を見て、つい嘔き出してしまった。

「心配するな、ちよつとやそつとの物音じゃ起きないから」

何を根拠に、と思ったが、彼の不思議な能力を考えると、不可能などない

のでは、と思えてしまう。人の身体を動かなくなったり、性欲を抑えられなかったり、人間とほぼ同じ見た目をした彼だが、やはり人間ではないのだと実感させられた。男同士がまぐわう声で夜中に母親を起こさずに済むのはありがたいが。

竜司はジョーカーの膝を掴み、再び腰を動かし始めた。快感に蕩けた顔で喘いでいるが、彼は淫夢だから排泄の為の穴を突かれても気持ち良くなってしまうのだろうか。亀頭で弱い所を押し上げてやると、彼は一際高い声を上げてがくがくと身体を痙攣させる。達者に動く口と同じくらい、その穴は竜司の性器に吸い付いてきていた。

「エロい身体してんな……」

思わず口をついて出た言葉に、ジョーカーよりも竜司自身が驚いていた。どんなにエロくて可愛い顔をしていてセックスが良くても、ジョーカーは悪魔であり、男だ。彼との性交を楽しんでいると思わせるような事は、決して言わない様にしていたのに。

ジョーカーは竜司の言葉を受けて、ますます嬉しそうに微笑んでいる。

「やつと認めたか？俺とお前の相性がいい事」

竜司の首に手を回し、更に身体を密着させた。抜き差しに合わせて後ろを収縮させ、摩擦を強めていく。早く精力を吐き出して欲しいと、下腹部が切なく疼いてしまった。

腰を揺さぶる度に、ジョーカーは黒豹の様な眼光と表情に似つかわしくない悩ましい声を漏らしている。竜司は彼の姿に惑わされ、更に身体が追い詰められていった。さすが悪魔と言うべきか、竜司は今までに見たどんな人間よりも彼の事を色っぽいと思った。そう思ってしまう魔法をかけられてしま

っているのかもしれないが。

「あつ、ひつ、そ、そこ、好き……！も、だめ……！」

ジョーカーの言葉に煽られて、竜司はますます腰の動きを速めた。

「俺も、いきそつ……」

竜司が後少して達するのを察し、ジョーカーは彼の腰に脚を回した。この時ばかりは驚く程に力が強く、やはり彼は悪魔なのだと思知らされる。竜司に四肢を絡ませ、全身で抱き付きながら、ジョーカーは彼の吐精を全て体内で受け止めた。

中に注ぎ込まれた体液が身に触れた瞬間に、ジョーカーは甘露を舌に垂らされたかのように恍惚とした表情になった。飢えがみるみる満たされていく。ジョーカーは体腔をなぞりながら奥へと流れ込んでくる竜司の精液の感触で達してしまった。

全て出し尽くしたのが分かると、ジョーカーはようやく竜司の身体を解放した。満腹感からぐたりと四肢を放り出して、身体を揺らす荒息を繰り返している。ジャケツトとネクタイと言う禁欲的な服装に包まれた上半身だが、スカートははしたなく捲り上げられていて、太腿の間では先端の白く汚れた性器が萎えて垂れ下がっていた。しかも少し前までの挑発的な表情とは違って変わって、性交の余韻に浸って気怠そうになっている。今でもまだ彼の身体はひくり、と小さく痙攣していた。竜司は目の毒だ、とでも言わんばかりに、彼の痴態から視線を逸らした。

竜司のベッドを大きな羽で占拠したまま、ジョーカーは小さく笑みを零した。竜司に提供される精力がやっぱり一番おいしく感じる。今まで男たちから奪っていた精力など、ただ空腹を紛らわす為の食料でしかなかったようだ。

竜司の精力はご馳走であり、人間が良く言う美食とはこの事だと感じる。

「やっぱり、竜司の精力は美味しい。俺、ここに住もうかな。そしたら毎日、精力補給できるし」

ジョーカーが零した言葉を聞いて、竜司は目が飛び出そうになった。

「何、勝手な事言っただよ！悪魔と一緒になんて住めるか！」

途端にしおらしい表情を作ると、ジョーカーは寂しげな瞳で竜司を睨み付けた。

「……俺の事、沢山抱いた癖に。面倒になったら、やり捨てる気か？」

作り物だとは分かっている、見た目だけは可愛いジョーカーに泣き出し

そうな顔で責められると動揺してしまう。思わず謝りそうになったが、竜司は状況を整理して、自分が丸め込まれているだけのだと気付いた。

「は、はあ？お前の方こそ俺のちんこにしか興味ないだろうが！」

竜司のあんまりな物言いにジョーカーも頬を膨らませる。

「そんな事ない！俺はお前が気に入ったからここに住みたいんだ！」

直接的な好意を向けられ、竜司も赤面してしまった。こんなに熱烈な告白、人間にもされた経験がない。口だけと思っただけでも、心はぐらついてしまう。

動揺して口籠る竜司を、ジョーカーが得意げな笑みと共にますます追い詰めていった。

「俺の事困いたって奴なんか、何人でもいるんだからな。お前、自分以外が俺を抱いてるっての嫌がる癖に、食の保障をしてくれないなんてずるいぞ」

咄嗟に反論しようとしたが、自分が何を言おうとしているか気付いて、竜司は口を閉ざしてしまった。

ずるいのはジョーカーの方だ。自分をこんなに誘惑しておいて、精力を奪

ったら他の男の元へと飛んで行ってしまふのだから。彼の魅力的な表情や言動全てが、その先に飢えを満たすという目的があつての事だと思つくと、虚しくてどうしようもない。好意を向けられていると勘違いして、彼を好きになつてしまふそうで、竜司はそれを恐れていた。暴力を振るわれたり、精神的に嫌な事をされたりした訳でもないのに、悪魔もやはり悪魔だと実感する。彼に他の男と寝る口実を与えるか、もしくは自分の部屋に居座らせるか。天秤にかける間でもなかった。

「……お袋には絶対見つかるなよ。言い訳も思いつかねえよ、悪魔を部屋に住ませてるなんて」

竜司の返事を聞いて、ジョーカーが露骨に嬉しそうな顔をする。しおらしい態度も、脅しの様な文言も、全ては彼の計算だったようだ。自分は見事にその罠にかかってしまったらしい。

「これで竜司の精気をいつでも好きなだけ頂戴できるな」

唇の前で指を立てたジョーカーが淫靡に目を細めて笑っている。竜司は全て彼の思い通りに事が運んでしまったのだと気が付いた。

前もってジョーカーに断りを入れておきたい事は山ほどあるが、もうなるようにしかならない、と諦めてしまった。竜司は部屋の電気を消すと、ベッドにどざりと倒れ込んでブランケットに包まれた。羽を仕舞ったジョーカーがいそいそと隣に横たわる気配がする。愛おしい恋人のように、背中からぎゅうと抱き締められて、竜司は頑なな心が絆されてしまふのを止められなかった。

ジョーカーと出会ってから、散々振り回されて、竜司は嫌な事を考える暇もなくなっていた。学校では鴨志田に嫌味を言われ、部活の仲間達とは疎遠

になり、每晚無意味に夜更かしをしていた憂鬱な毎日が、今では彼と言う強烈な存在に塗り潰されている。悪魔に救われたなど笑えないが、竜司は彼と出会ってから、人生でも一、二を争う最低な日々から抜け出す事が出来ていると認めざるを得なかった。

竜司の部屋はいつも散らかっている。床には読みかけの漫画雑誌やトレディング器具やゲームが散乱していて、ベッドの上にも寝間着が脱ぎ捨ててあった。こんなに汚い部屋に住んだのは、ジョーカーも初めての事だった。少しは掃除しろ、と何度言っても彼は聞き入れない。

気分転換に部屋を出ようにも、竜司には他の男の精力を奪うと言われていいるし、そしたら外をうろついても仕方ないしで、ジョーカーは竜司の部屋で毎日ただただ退屈な時間を過ごしていた。今日も、ベッドの上で何時間過ごしているだろう。漫画もゲームも、初めの内は面白くて、竜司が呆れる程に何時間も没頭した。そのおかげで見識が拡がり、元々住んでいた世界とは違う、こちらの世界の勉強も出来た。だが、それらは何日も暇を潰せるものではない。一通り読んで、遊びつくしてしまうと、待っているのは一人きりの退屈な時間だ。夢魔のジョーカーにとって一番楽しいのは、やはり竜司から精力を貰う瞬間だった。

朝から家を出て、帰ってくるのは夕方。人間は悪魔と違って、学校と言う

場所に通わなくてはならないそうだ。せつかく一緒に住み始めて、好きなだけ精力を貰えると思っていたのに、狙いが外れてしまった。

と言うよりも、彼は学校と言う逃げる場所があったから、同居を許可したのかもしれない。そんなに避けなくてもいいのに、とジョーカーは頬を膨らませた。その気になれば命を落とすまで精力を奪い取る事も出来るが、竜司を殺したくないから手加減しているのに。自分がどれ程彼を大事に思っているか、彼は全く分かっていない。

「ただいま」

竜司の声が部屋の外から聞こえる。ジョーカーは勢いよくベッドから起き上がると、まさしく羽が生えたような足取りで彼を迎えに玄関へと向かった。

「お帰り、竜司」

靴を脱いでいた竜司が、部屋から出てきたジョーカーを見てぎよつとした。まるで動物園で檻の外に出してしまったライオンか豹でも見つけたような顔だ。

「部屋から出てくんなくて！お袋に見つかったらどうすんだ？」

「大丈夫だ。まだ仕事中だし」

竜司の文句を聞き流しながら、ジョーカーは彼に抱き付いてキスをした。同時に少しだけ精力を吸い取る。学校から帰ってきたばかりで疲れているのに、と竜司が視線で訴えてくるがお構いなしだ。空腹と退屈を何時間も耐えたのだから、これくらいのご褒美を貰わないと割に合わない。

キスをしている内に、ジョーカーは身体からさつきまでの倦怠感が抜けていくのが分かった。セックス程ではないが、これだけでもおやつを食べるくらいには、飢えを癒す事が出来たようだ。名残惜しそうに口を離すと、ジョ

「カーは嬉しそうな笑みを浮かべた。

「寂しかった。ずっと一人で待ってたんだぞ」

それを聞いて物言いたげだった竜司も、観念したように軽く肩を落とした。キスで精力を奪ってくる程に腹を空かせているのも、律儀に自分との約束を守ってくれているからだろう。学校に行っている間、彼をずっと部屋に閉じ込めているのが気の毒なのは事実だ。だが彼が浮気するかもと言う懸念もだが、この目立つ羽と衣装と目をした彼を、ふらふらと出歩かせる訳にもいかないので我慢して貰っている。

「今度の休みはどこか遊びに行くか？」

竜司の提案にジョーカーは目を輝かせて頷いた。

部屋に閉じ込められている間、何度も元の世界へ帰ろうかと考えてしまった。だが彼が帰ってくると、待っていた甲斐があると思える。なんだかんだ言って、竜司は今までに会ったどの人間よりも優しくかった。

「どこに行く？俺、竜司とならどこでもいい」

前のめりで誘いに乗ってくるジョーカーを、竜司が両手を前に出して制止した。週末はまだ先だ。今すぐ出かける訳でもないのに、気が早過ぎる。

「出かけるにしても夜だな。お前はラーメン食えないだろうし、ゲーセンか釣り堀か……。ところで、その恰好どうにかなんねえの。俺、お前と一緒に歩いてて補導されない自信ねえんだけど」

話ながら竜司は冷蔵庫を開いて、中から牛乳パックを取り出した。コップに注がず飲み始め、もう半分も空にしている。

育ち盛りの身体が栄養を欲しているのだろう。彼は人間で言ったらまだ成長過程らしい。と言っても、夢魔のジョーカーにとって、まだ十数年しか生

きていない竜司など赤ん坊のような物だが。

「俺もお腹空いた。竜司、ご飯」

喉を鳴らして牛乳を飲む姿が美味しそうで、ジョーカーも誘われてしまった。ジョーカーの言うご飯とは、竜司の精力の事である。キスでもフェラでも何でもいから、夜が来る前に一度飢えを満たしたい。

ジョーカーから子供の様にねだられて、竜司は飲み干そうとしていた紙パックを彼へと差し出した。

「ん、後飲んでいいぞ」

竜司が何故自分に牛乳を差し出したのか分からずに、ジョーカーは疑問符を浮かべた。

「なんで牛乳？」

予想と違う反応だったのか、竜司まで首を傾げている。

「あれ、ネットで見たんだけど……。淫魔って、枕元に牛乳置いてたら、精液と勘違いして飲むんだろ。お前も牛乳が好物なんじゃねえの？」

彼の物言いに腹を立てて、ジョーカーはむっと頬を膨らませた。精力を分けたくないから、牛乳で満足しろと言われていている気分だ。

「別に好きじゃない。そんなの、飲んだとしても仕方なくだ。お前は、和牛のステーキ食べた時に豆腐のステーキで満足できるのか？」

虫の居所の悪くなったジョーカーが、竜司の元へずいと近寄った。至近距離で彼の顔を見つめながら、彼のベルトのバックルを外すと、制服のズボンの中に手を差し込む。

「いっ……！！」

竜司は手に持っていた牛乳パックを思わず取り落としそうになった。まだ

日も落ちていないのに、自室の外である台所で性器を触られている。身体は勝手に反応を示してしまうが、それ以前に後ろめたさから、竜司は心臓が縮んでしまった。

場所がどこであるかなど構わずに、ジョーカーは竜司の物を下着の中ですりすりとお撫で上げていた。大きな赤い瞳に熱情を宿して、舌なめずりをしてる。

「竜司が学校に行ってる間、ちゃんと外に出ないで留守番していたんだ。だから、ご褒美をくれ。いいだろ？」

「分かった、分かったから！」

竜司はジョーカーの手を掴んで愛撫を止めさせると、飲みかけの牛乳パックを冷蔵庫へとしまった。彼があんまり物欲しそうな顔をしているから、ちよつと揶揄っただけなのに。彼は余程、腹を空かせているのだろう。

「せめてシャワー浴びさせてくれ。俺、走り込みしてきたから汗まみれだぞ」それを聞いてジョーカーが怪訝な顔をする。

「走り込み？なんで」

予想外の指摘を受け、竜司の顔色が変わった。彼は自分が少し前まで短距離走の選手だった事を知らない。学校どころか住む世界の違う彼には関わらない事だ、と思い、鴨志田や陸上部の事を話していなかった。

「身体なまるから、時々走ってんだよ」

はぐらかすような竜司の態度に、ジョーカーも不審そうだ。

「そういうえば、お前の部屋にトロフィーあったよな」

部屋に一人でいる間、ジョーカーは竜司の部屋を隅々まで探索し尽していた。彼自身よりも、彼の私物がどこにあるのか把握しているのではないだろ

うか。ゲームのケースの中にいやらしい映像作品が紛れている事も、押し入れの中に年齢制限のある雑誌が隠されている事も知っている。それ以外にも本棚の上で埃を被っているトロフィーが、短距離走での好成績を讃える物だと言う事も。

「竜司、陸上やってるのか？足早いのか、かっこいい。俺、空飛べるから、あんま走るのには得意じゃなくて」

それを聞いて、竜司は彼をトレッドミルで走らせたらどうなるのかを想像してしまった。いつも自分を振り回してくる彼が、回し車を回し損ねたハムスターのように扱ってしまう姿が目につかぶ。すらつとした出で立ちの彼に似つかわしくないその光景に、竜司は思わず嘔き出してしまった。

「何笑ってるんだよ」

「悪い、お前にも苦手な事ってあるんだな」

竜司はジョーカーから逃げる様にして風呂場へと向かった。

話題が自分の陸上からジョーカーの運動音痴に移ってしまったのは好都合だった。部活の事は余り深く掘り下げても、彼を楽しませるような話題ではない。陸上部だった頃の記憶は可能な限り、自分でも触れないようにしている。

昔は棚に並べたトロフィーを見て、誇らしい気持ちになっていたのが嘘のようだ。埃の積もった勳章は、今となっては自分が奪われた物の象徴ではない。竜司はこんなに鬱屈とした自身の一面をジョーカーに見せたくなかった。

夕方の浴室は既に薄暗くなってきたが、明かりを点けるにはまだ早く感じた。窓から差し込む斜陽が、室内に籠った水蒸気を白く煙らせている。短い金髪を一瞬で洗い終わると、竜司は湯船に浸かって深く息を吐いた。

身体を温めながらふくらはぎの筋肉を伸ばして、脚の調子確かめる。陸上部で現役だった頃に比べると、少し縮まりが無くなってきた。タイムも大幅に落ちている。

だが、それは、単純に練習不足が原因ではない。

竜司は湯の中で手を自身の足首へと伸ばした。鴨志田に付けられた傷跡がまだ残っている。壊された瞬間の痛みは今でも忘れられなかった。肉体的な苦痛もだが、鴨志田に足を振じられる直前、自分にとって大切な物を奪われるのはつきり分かり、心の底から恐怖を感じた。もう治ったはずなのに、今でも走っていると、当時の痛みの記憶に苛まれてしまう。こんな状態で、昔のように全力を出せるはずがない。

足が速いのはかっこいいと言うジョーカーの笑顔が頭の中で蘇る。褒めてくれたのにその言葉を素直に喜べなかったのは、自分はもうあのトロフィーを勝ち取れるような人間ではないからだ。もう自分に備わっていない物を褒められても、虚しく感じてしまう。

彼が見つめる前に、埃の積もった過去の栄光など潔く捨ててしまえば良かったのだろうか。自分の大部分を締めていた物をいきなり奪われて、その残滓まで捨て去る勇氣は、流石になかった。

滅多にしない考え事を湯船の中でしていたら、浴室の扉の磨りガラス越しに、真つ黒な影が現れた。部屋で待っているように言ったが、珍しく長風呂になってしまったので、彼も痺れを切らしたらしい。

「竜司、のぼせてないか？」

ジョーカーが扉越しに問いかけてくる。もう身体も洗ったし、これ以上彼を待たせる理由もない。

「そろそろ出るから」

全身から湯を滴らせながら竜司が立ち上がる。それとほぼ同時に、浴室の扉が開いた。

目の前に現れたのは、一糸纏わぬ姿になったジョーカーだ。いつものSMクラブの女王様の様な衣装を脱ぎ、白い肌を惜しげもなく晒している。化粧も落としたのか素顔になっていて、竜司は初め彼が誰なのか分からなかった。

「俺も入る」

口角を上げて微笑んだジョーカーが、羽を縮こませながら浴室の中へと押し入ってきた。待ち草臥れて、腹を立てていると言った様子ではない。むしろ、彼は空腹など忘れてしまったかのように、楽しそうにしている。

一人で使う分には不自由した事はなかったが、二人で使うと身動き一つ取れないくらいに浴室が狭く感じた。一緒に居るのが羽と尻尾の生えた悪魔となると猶更だ。竜司は迷惑そうに目を細めた。

「もう出ると言っただろ。入りたいなら一人で入れよ」

脱衣所へ向かう竜司を通せんぼするように、ジョーカーが羽を浴室一杯に広げた。意地悪な笑みを浮かべて、竜司を浴槽へと押し返す。

「背中洗って。羽の間、届かないから」

もう上せそうなくらい浸かった湯船に、また戻されてしまった。羽の生えた背中をこちらに向けて、床に座ったジョーカーが待ち遠しそうにこちらを見ていた。彼の身体を洗ってやるまで、風呂場から出してもらえないようだ。意味の分からない嫌がらせを受けて、竜司は頭を抱えながら項垂れた。

これが可愛い女の子だったなら、嬉しいハプニングとして受け止めていたかもしれない。だが、相手はジョーカーだ。彼は男だし、自分と同じ身体をしている。そもそも、彼とは毎日の様にセックスをしている仲だ。今更裸で接触し合ったところで、新鮮味などない。

彼は一体何がやりたいのだろう。悪魔の考える事は、よくわからない。

竜司は眉間を軽く抑えて溜息を漏らすと、観念してシャワーヘッドを手に取った。

「お前悪魔なんだから、風呂なんて入る必要ないだろ」

蛇口を捻り、シャワーのお湯をジョーカーの頭に流しかけながら、竜司がそう零した。長い癖毛が水で伸ばされ、羽の間に垂れて白い背中を覆っている。女のような髪だが、肩周りの骨格の逞しさが、彼の性別をはっきりと主張していた。

ジョーカーがうつすらと笑いながら竜司へと視線を寄越した。

「いいだろ。俺も気分転換したかった。人間が風呂に入るのは、ただ身体を洗う為だけじゃないって、何かで見たぞ」

水に濡れた前髪を掻き上げた彼は、男として完全に負けた、と思える程に色男だった。女装と化粧をしていなかったら、自分と同じ年頃の、綺麗な顔をした普通の男にしか見えない。本当に彼が自分に抱かれて喘いでいたのかと、竜司は疑いそうになった。何故この容姿を持っていながら、敢えて男を

誑かしているのだろう。彼の顔なら、頼まなくても女の方から寄ってくるだろうに。

泡を立てた浴用タオルで、羽の付け根を洗ってやる。そこは敏感なのか、ジョーカーはくすぐったそうに身を振った。

「あはっ、竜司……！もっと、優しく擦って」

普通に洗っているだけなのに、彼が妙な声音を出すので、竜司は戸惑って手を引っ込めてしまった。これでも自分の身体を擦るよりは優しくしているつもりだ。

「力加減かんねえよ。そんな言うなら自分で洗えって」

「やだ、竜司がいい」

駄々をこねるジョーカーに竜司が困り顔をした。普段は大人びているのに、彼は時々突拍子もない事を思いつく。きっと彼にとって自分は揶揄い甲斐のある相手なのだろう。感情的で、単純で、悪魔に弄ばれても仕方がない性格をしていると我ながら思う。しかも、彼の要求を突っぱねる事が出来ないくらいには、好意を寄せてしまっている。

「ったく、めんどくせえな……」

竜司はボディタオルを片付けると、ジョーカーの滑らかな肌を手で直接撫で始めた。蝙蝠の様に薄い皮膚の羽も泡で覆っていく。力加減を間違えると破れてしまいうさだ。羽の折れ曲がった部分にある小さな鉤爪も、指を引っ搔かないよう気を付けながら洗ってやった。

「ん、上手」

ジョーカーが満足気に微笑んだ。紳士的な手つきも出来るじゃないか、と感心する。ベッドの中では乱暴にされてばかりなので、彼の指がそっと肌を

撫でる感触が新鮮だった。食事とは違う理由で抱かれたらこうしてもらえ
のだろうかと思像してしまい、少し胸がどきどきする。

竜司に身体を擦って貰いながら、ジョーカーはうつとりとした顔つきにな
っていった。背中だけでなく、首元や指先、脚の付け根まで、丹念に洗っ
てくれている。だが竜司はいつも通りの顔つきで、どこを撫でている時も、特
段いやらしい狙いはなさそうだった。一人で意識しているのが気恥ずかしく
なって、ジョーカーは彼の手から意識を別の事に逸らそうとした。

「なあ竜司、学校って楽しいのか？」

竜司が学校に行っている間、いつも一人で寂しい思いをしている。だから
せめて彼が家にいる間は、片時も離れたくない。竜司と出会うまで一人が当
たり前だったのに、彼が自分の居場所を作ってしまった。だが彼にとっては
学校こそが彼の居場所なのだろうかと考えると、なんだか心細くて堪らない。

ジョーカーの問いかけに、竜司は無意識に渋い顔をして見せた。

「楽しくて通ってる訳じゃねえよ。行かねえとオフクロに悪いからな」

鴨志田の事件があったとき、竜司は教師に手を上げた問題児だと言われ、
退学させられそうになった。それを止めてくれたのが、他でもない竜司の母
親だ。彼女は何も悪くないのに、竜司を学校に残すため、鴨志田なんかは頭
を下げてくれた。その後も、自分を責めるような事を彼女の口から聞いた記
憶はない。

そこまでしてくれた母親の気持ちを考えて、居場所がないと言うだけで
学校をサボるのは間違っていると感じる。鴨志田や他の教師や生徒達からど
んな扱いを受けようと、学校に行くと竜司は心に決めていた。

「楽しくないのに、毎日行ってるのか？」

竜司は何も答えない。難しい顔をして、無言でジョーカーの身体を擦り続
けている。

多くを語らない竜司をジョーカーも怪しんだ。彼と母親の関係は多少知っ
ているつもりだが、学校にはジョーカーも行った事がない為、そちらでの生
活は竜司が話してくれない限り、窺い知る事は出来ない。

「まあ、喋りたくないなら、無理には聞かないけど……」

ジョーカーが少し拗ねたようにそう呟く。竜司はまだ、自分が彼の精力だ
けを目当てにここにいると思っっているのだろうか。相手ならいくらでも選べ
るが、彼の事が好きだから、敢えてこの家にいるのに。窮屈な思いをしなが
ら男と一緒に風呂に入るのも、ジョーカーには初めての経験だった。それな
のに、他の男と一緒に入った豪華な浴室よりも、この狭い洗い場を居心地よ
く感じている。

「俺の事、まだ信じられない？自分の事も、話したくないくらい？」

寂し気な目で問いかけられて、竜司は返事に詰まってしまった。彼の事を
信じている、と言えば嘘になる。何故なら彼は夢魔だからだ。彼は今までに
何人もの男たちを誑かして彼らの精力を奪ってきている魔性の男だ。そんな
彼から気に入ったと言われても、自分に都合の良い妄想にしか聞こえない。
いつかこの関係に飽きてしまったら、あっさりどこかへ飛んでいくのでは
ないだろうかと思ってしまう。

それでも竜司は、こんな事を聞いてくるジョーカーを目新しく感じた。事
ある毎に人の身体を求めてくる彼が、その中身に興味を示している。彼は精
力以外に興味がないだろうと思っっていたのは、誤解だったようだ。

有無も言わず上に乗っかってくる程に積極的なジョーカーが、今はしお

らしい態度でいる。人を貪ろうと瞳を妖しく輝かせている時とは違い、どこか影のある面持ちで、何かを考え込んでいた。こうしていると、彼も可愛げがある。人を誘惑する存在なのだから、魅力的に見えて当然なのだろうが。そもそもこの愁いを帯びた表情さえ、自分を惑わすための物かもしれない。

一緒に風呂に入って初めて、竜司は彼の事をじっくり観察出来ている気がした。顔は綺麗だし身体も均整がとれているし、夢魔と言うのは本当に人間の理想の姿をしているのだと思う。どちらかと言うと、化粧をしていない時の顔の方が好みだった。赤く染めていなくても彼の唇は綺麗な色をしているし、長い睫毛は赤い瞳に影を落とす程密に生えている。肌にも色を付けていない時の方が、彼の綺麗な顔立ちをちゃんと見る事が出来ていい。

泡に塗れた竜司の手がジョーカーの尻尾へと降りていった。羽の付け根と同様に、こちらにも敏感なのか、色が変わる部分を指でなぞってやると、ジョーカーの肩がびくりと揺れた。竜司は彼に優しく擦って、と言われた事を思い出し、繊細なガラス細工でも触るような手つきになった。

ジョーカーはどうしたら竜司が心を開いてくれるのか考え事をしていて、油断していた。竜司に尻尾を触られるのは初めてだ。人間には尻尾がないので、ここがどれだけ刺激に弱いのか、彼にはわからないのだろう。根元を優しく擦られて、彼はただ身体を洗っているつもりなのだろうが、ジョーカーにとっては生殖器を掠めるギリギリのところを愛撫されている気分だった。

「そこ、弱いからっ……」

弱々しい声音で訴えたが、竜司はその意味を深く捉えなかった。

「だから優しく触ってるだろ？」

もうお互いに慣れ合ってしまったって、竜司は自分が彼に何をしているの

か、意識すらしていなかった。自分達が裸でいると言う感覚もない。何かする度に彼がいやらしい反応をするのもすっかり見慣れていた。それが夢魔の性質なのだろうと軽く流してしまうと、竜司は再びジョーカーの身体を洗い始めた。

尻尾の根元を優しく掴み、細くなっていく先端までするりと撫でて擦り上げる。ジョーカーは甲高い悲鳴を嘔み殺し、竜司の無意識の愛撫を耐えた。同じ手つきでお前のも触ってやろうかと言ってやりたくなくなる。

竜司が尻尾の先端にある矢じりと似た形をした部分を、手のひらで包み込んで優しく擦り始めた。人間の臀部にこんな物はない。手元を見ずにここだけ触っていると、珍しい動物の身体の一部の様だ。不思議な感触と造形を楽しむように、竜司は指を動かした。

前に読んだ少年漫画で、ここが異様に敏感な、可愛い女の子の悪魔がいた事をふと思い出す。まさか彼も同じなのだろうか、平べったい尾の真ん中にあつた軟骨の様なものを、竜司は試しに少し強く押してみた。まるでそれがスイッチだったかのように、ジョーカーは全身を痙攣させた。

「あつ、ああ！ひっ……！」

目に火花が散りそうな刺激を与えられ、堪らず浴室の床に突っ伏してしまった。さっきまで優しく触ってくれていたのに、急に酷くされたので、油断していたジョーカーは足先にまで痺れが走っていた。竜司に腰を突き出すみっともない姿勢だが、尻尾を弄られた余韻で身体が思うように動かない。

「わ、わりい！」

ジョーカーが想像以上の反応を返したので、竜司は反射的に彼の尻尾から手を離れた。彼には悪いが、漫画で読んだ通りだと感心してしまう。

「りゅ、竜司、俺、そこ、弱いって、言っただろ……」

涙混じりに訴えてくるジョーカーを見て、竜司もさすがに罪悪感が芽生えた。彼の弱点である尻尾を、そうとは知らず、しつこく弄り回してしまった。もう遠慮も何もない間柄とは言え、面白がって身体のいたるところをまさぐってしまい、彼に対して少し申し訳なく思った。

もうこれ以上は彼の身体を悪戯に刺激出来ない。竜司は手を引つ込めると、ジョーカーの身体を覆う泡をシャワーで洗い流し始めた。露わになった尻尾を先端から付け根まで熱心に観察する。

「なんでここ、敏感なんだ？ここ触られるのって、どんな感じ？」

竜司の視線に晒されて、ジョーカーは後ろの窄まりがヒク、と蠢いた。彼にとつて尻尾はもう一つの性感帯である。異質な皮膚の繋ぎ目は、痛みを感じない傷跡の様なもので、竜司に触られたり見つめられたりすると、身体が堪らなくぞくぞくしてしまった。

「竜司にとつて、ちんこ触られるみたいなものかな」

ジョーカーの返事に竜司も驚き、顔を赤くした。人間と同じ性感帯は出来るだけ触らないよう、注意していたつもりだったのに。自分がどんな手つきで彼の尻尾を觸ったか思い出して、身体が熱くなっていく。

「は？ま、マジで……？だってお前、これいつも外に出してるだろ」

「服の中に入れてたら、擦れるから」

床に横たえていた身体を重たげに起こすと、ジョーカーは竜司へと色つばい目を向けて、口元に微笑を湛えた。その表情に誘われてしまい、竜司は思わず生唾を呑み込んだ。

ジョーカーが自身の身体を撫で下ろしながら、竜司に物欲しそうな表情で

迫った。

「竜司のせいで、熱くなった。エッチなこと、する？ここじゃ狭いけど」

危うく理性が飛んでしまう所だった。竜司は慌てて湯船から立ち上がると、ジョーカーの脇を通って逃げる様に脱衣所へと向かった。

「俺、先上がるから」

母親がいつ帰ってくるか分からないのに、風呂場でジョーカーと事に及ぶなど危険な事は出来ない。いくら彼がスキルを使えるとは言え、母親を脱衣所で昏倒させる訳にはいかないだろう。

「待って、俺も上がる」

置いて行かれそうになり、ジョーカーも立ち上がって竜司の後を追った。その時になって初めて、ジョーカーは彼の足首に残る痛々しい傷跡に気が付いた。怪我で残った物ではないと一目でわかる。反射的に竜司の腕を掴み、彼を引き留めた。

「竜司、その足……」

ジョーカーの視線の先には、鴨志田に付けられた傷跡の残る、竜司の足首があった。痛々しい傷だが、真新しい物には見えない。だが、時間が経ってもここまではつきりと跡が残ってしまう、深い怪我を負ったのだろう。一体どんな目に遭ったのかと、心配になってしまう。

竜司は一瞬、適当な嘘で誤魔化そうかと考えたが、彼には見破られそうだったので止めた。それに、まだ何も話していないのに、ジョーカーは顔を曇らせている。この傷をつけた人間が今でも学校で横暴を振るっていると知ったら、ますます彼を不安がらせるだろう。

「別に、もう痛くねえから。心配すんなって」

竜司はタオルを手にとると、ジョーカーの髪の毛を雑な手つきで拭いてやった。彼を安心させるように、満面の笑みを浮かべる。

「それよりお前、腹減ってんだろ。俺もやりたい気分。早く部屋に行こうぜ」
珍しく竜司の方から誘うような事を言ってきたので、ジョーカーは目を丸くして驚いた。さつきまでの矜りは直ぐに消え失せ、上機嫌な笑顔になると、彼は濡れたままの身体で竜司に抱き付いた。

「今日は寝かせないからな」

ジョーカーの一言に竜司も苦笑いを浮かべる。

「いや、明日も学校だから……」

竜司は内心、彼の気を巧く反らす事が出来て、胸を撫で下ろしていた。彼は悪魔なのに優しい所があるし、正義感も強い。鴨志田の事を知って、黙っているとは思えなかった。彼は人間そっくりだが、中身は普通の人間ではない。その気になれば、彼の持つ悪魔の力を悪用する事だって出来てしまう。心配しすぎかもしれないが、彼には今のままで居て欲しい。竜司はジョーカーが自分の為に手を汚すところなど見たくなかった。

洗面所の鏡の前で、ジョーカーがぐるりと一回転した。毎日毎日竜司が着ている姿を見ていたので、制服はちゃんと再現出来たと思うが、心配なのは羽と尻尾だ。人間の振りをするなら、服装よりもまずはその二つをちゃんと

隠さなければならぬ。ジョーカーは秀尽学園の制服から黒い羽と尻尾が生えていないかを入念に確かめた。

ジョーカーは鏡に映る自分の姿を見て、得意げに微笑んだ。我ながら人間そっくりだ。精気を奪う相手の好みに合わせる事もあるので、外見を変えるのは悪魔の得意技である。この姿なら竜司も、目立つから外に出るな、などとは言えないはずだ。

竜司のいる学校に潜入する為、いつもの黒い服を脱ぎ、竜司と同じ制服を身に着けた。ただ、彼の着こなすは派手過ぎるので、参考にはしていない。代わりにジョーカーは、人目につかないよう、学校のパンフレットの生徒の様に、ちゃんと指定のインナーを着て、ジャケットもボタンを締めていた。ズボンの裾も折らずに、ウエストはサスペンダーで止めた。

人間の男らしく、長かった髪も短くして、赤い目が目立たないよう眼鏡もかけている。鏡に映った自分を見て、余りの地味さに驚いた。人の多い所に行けば、誰も自分の存在など気にも留めないだろう。竜司の脱色しきった金髪と違い、黒髪と言うのは、群集に紛れる上で最適だった。

玄関から外に出ると、ジョーカーはキーピックでドアを施錠し直した。空を飛んでいこうとした所で、今は羽を出せないのだと気付く。不便だが、足で移動するしかない。

歩き出して数分後、ジョーカーはもう歩く事に飽きて、羽を出してしまいたいようになっていた。竜司がこれを毎日繰り返している事を考えると、とても自分には真似できないと思う。だが、そうまでして彼が通う学校と言うものに、ジョーカーはますます興味が募っていった。

竜司が何も話してくれないのなら、自分で探るしかない。足のケガと、埃の積もったトロフィー、そして楽しくないのに律儀に通っている学校。輝かしい成績を残す陸上選手と、学校に渋々通う金髪の彼は、なんだか嘯み合わない気がした。だが、きつと自分に見せようとしないう一面を覗き見れば、それらのピースは綺麗に嵌る様になるのだろう。

家にいる時の彼なら知っているが、彼は一日の時間の大半を学校で過ごしている。そちらの彼を見ずして、竜司と仲が深まるはずがない。既に何度も身体を重ねているが、ジョーカーは竜司の事を良く知らなかった。人間は本当なら順番が逆かもしれないが、竜司にはもつと心を開いて欲しい。ただ彼から精力を貰うだけの関係では、ジョーカーも満足できなくなっていた。

もしかしたら短距離選手として活躍する姿が見られるかも、などと期待しながら、ジョーカーは軽やかな足取りで秀尽学園へと向かっていった。

白く四角く画一的な建物は、まるでその為の看板になってしまったかのよう、真正面に巨大な垂れ幕がかけられていた。そこに書いてあるのはバレ一部の活躍ばかりで、陸上部の文字すら見当たらない。あんなにトロフィーを獲得している短距離の選手がいるのに、存在自体を無視されている。学校に来さえすれば解消すると思っていた違和感は、ますます強くなるばかりだった。

始業時間を過ぎていたので、学校の正門は既に施錠されている。羽を広げて飛び越えるかと思つたが、生徒達の姿が辺りにちらほら見えた。学校内に

侵入しようとする悪魔を見て、彼らが騒がないで居てくれるだろうか。諦めたジョーカーは鉄柵に手と足を掛けると、勢いをつけて門を飛び越えた。

ちょうど昼休みだったらしく、玄関から校内に入ると、秀尽学園の生徒たちが教室を出て廊下のいたるところに屯していた。休み時間だと言うのに、彼らはとても暗い顔をしている。学生生活を楽しんでる様には見えない。漫画で読んだ昼休みは、もつと楽しい時間だったはずだが。

竜司を探して校舎内を歩き回っている内に、ジョーカーはある事に気が付いた。この学校は、何故か怪我をしている人間が多い。手や足に痣が残っているどころか、包帯を巻いている生徒までいる。学校で勉強をするくらいで、こんなに身体を痛めるなど、聞いた事がない。

階段を上った先の二階で見かけた一人の男子生徒に声をかけた。

「なあ」

廊下でスマホを弄っていた少年が、驚いて肩を小さく跳ねさせた。気の弱そうな少年で、彼も顔に痣がある。

重苦しい雰囲気のある学校や垂れ幕、生徒達の怪我の事は一先ず置いて、ジョーカーは竜司を見つける事にした。彼から直接聞いた方が、きつと話が早いだろう。

「竜司いる？」

秀尽の制服を着ているとは言え、見知らぬ生徒に話しかけられて、少年は戸惑っているようだった。しかも、彼が尋ねてきているのは、選りにも選つてあの問題児の名前だ。黒髪に眼鏡と大人しそうな風貌をしている彼も、佇まいは堂々としているし、雰囲気は少し変わっているし、とても真面目な生徒には見えない。眼鏡と前髪の隙間からちらちら見える赤い瞳も気になって、

少年は彼の事を怪しんでしまった。

「竜司って、坂本竜司？いや、見てないけど……。と言うか、ごめん、君誰だっけ？俺、前に話した事ある？」

ジョーカーは彼の顔をじっと見つめた。虱潰しに学校内を歩き回っても、竜司は見つからないだろう。探すにしてもある程度目安をつけないと、昼休みが終わってしまう。彼は扱いやすそうだし、少し協力して貰おう。

少年はジョーカーに見つめられて、妙な気分になってしまった。彼のように綺麗な顔をした男が、秀尽学園にいたのだろうか。表情だけでなく、言葉遣いや振る舞いが、いちいち大人びた色気を帯びている。不良の竜司が彼と一体どんな関係なのか、疑ってしまった。

ジョーカーが少年の手を掴み、にこりと微笑んだ。その瞬間、少年の心臓が大げさな程に強く脈打った。

「一緒に探してくれないか？竜司にちょっと用事があるんだ。君、名前は」彼の手を、振り解く事が出来ない。掴む力が強いからではない。彼には抗えないのだと、彼の妖艶な笑顔を見た途端に理解してしまった。

触れられている手が異様に熱くなっていく。相手は男だと言うのに、胸が高鳴って、少年は息も出来なくなる程に緊張した。

「み、三島」

「分かった。じゃあ三島、竜司がいそうな所に連れてってくれ」

強引な提案にも関わらず、三島はジョーカーをすんなりと受け入れてしまった。手が触れただけなのに、三島はジョーカーの顔を直視する事が出来ない程、彼に対してやましい気持ちを抱いてしまっていた。男相手に、自分もどうかしていると思う。彼の尋常じゃない魅力が悪いのだ。後ろめたさと

動揺を誤魔化すように、三島はジョーカーに先立って校舎内を歩き始めた。

ジョーカーはすっかり惑わされている様子の三島に対し、見えない所で小さく舌を出した。利用して悪いと思うが、竜司を見つける為なので仕方ない。彼が竜司の事など知らないと言う態度だったら、こんな手は使わなかったのだが。自分は運が良かったが、彼は運が悪かった。

昨夜、竜司に沢山精力を貰ったので、力は有り余っている。その気になれば、この校舎内の全員にマリンカリンを掛ける事も出来るだろう。竜司が浮気だと拗ねるので、必要最低限に抑えて置くが。まさか、三島と手を繋いだくらいでは、浮気にカウントされれないと思いたい。

三島の後を付いていきながら、ジョーカーは彼に学校の事を聞いた。

「三島はどうしてそんなに怪我をしているんだ？」

聞かれたくない事だったのか、頬を紅潮させていた三島の顔が、一瞬にして青ざめた。

「バレー部だから、仕方ないよ。あれだけの実績を残せるのも、鴨志田先生のおかげだからさ」

「鴨志田？」

ジョーカーの反応に、三島は開いた口が塞がらなくなった。この学校で一番の有名人の名前を知らないとは。

「鴨志田先生だよ、バレー部顧問の。君、もしかして一年？他の先生はまだいいけど、鴨志田先生は憶えておいた方がいいと思うよ。目を付けられると、大変な事になるから……」

話している途中で、三島は突然黙り込んだ。

彼の視線の先に、ジャージを着た一人の男性教諭がいる。教室の扉を屈ま

なければ通れない程に背が高く、身体は鍛え上げられていて、筋肉がシャツに浮かび上がって見えた。教師と言うよりも、一流のスポーツ選手だ。

三島の真つ青な顔を見て、ジョーカーは直ぐに悟った。あの男が鴨志田だ。鴨志田は一人の女子生徒に気を取られているらしかった。三島が会話で彼の名前を出していたが、彼の注意はこちらへ向いていない。

彼が話しかけているのは、金髪碧眼の、人形の様に美しい少女だった。その輝かんばかりの美貌に、彼女はサキュバスなのではとジョーカーも疑いそうになる。もしそうだったら、竜司に近づかないよう牽制しなくてはならないが、サードアイで確かめても、彼女には羽も尻尾も生えていない。一先ず、ライバルにはならなそうだと安心する。

サキュバスではないが、彼女の魅力は、望まなくとも男を惹きつけてしまっているようだった。

鴨志田と好き好んで話しているのではないと言う事が、彼女の表情を見るだけで分かる。一方的に話しかけられて、適当に相槌を打ちながら顔に笑みを張り付けているだけだ。だが余りのしつこさに、その笑顔が徐々に崩れかけてきている。会話の内容は差し障りないが、鴨志田が高巻と言う少女に対して、教師と生徒と言う関係以上の物を求めているのだとジョーカーは直ぐに理解した。

思いつくと同時に、ジョーカーは声を上げていた。

「鴨志田先生、高巻さんに用があるんですが」

ジョーカーが突然、鴨志田へと話しかける。それに誰よりも驚いたのは三島だ。鴨志田が敵意も露わにジョーカーを睨み付けてきた事に気付くと、彼は怯えた表情になり、逃げ出してしまった。

鴨志田が眉間に皺を刻みながらジョーカーの元へ歩み寄ってくる。

「なんだ、お前は。見かけない顔だな。高巻にどんな用事があるってんだよ」

三島の顔の傷は、鴨志田がつけたに違いない。だとしたら、彼が逃げ出したのも無理はない話だ。校舎内でちよくちよく見かけた傷だらけの生徒達も、恐らくこの男の被害者だろう。

ジョーカーは彼を鋭い眼光で射竦めそうになるのを、どうにか眼鏡で隠して誤魔化していた。良い成績を残しているバレエ部の顧問だからか、まるで横暴な王様の様に振る舞っている。自分が直接被害に遭った訳ではないが、ジョーカーは鴨志田の様な人間を受け入れられなかった。

彼にも三島に対しての様にスキルを使えば、この場合は丸く収まるのかもしれない。だが、こんな下衆な男を魅了する気になれなかった。この男から精力を吸い取るなど、想像するだけで気持ち悪くなる。

ジョーカーの反抗的な態度を察してか、鴨志田がますます厳めしい顔をして彼に詰め寄った。

「何睨み付けてんだよ。ん？お前、なんで目が赤いんだ。何か入れてるんだつたら校則違反だぞ」

「何も入れてない。これが俺の元々の目だ」

鴨志田に威圧されても、ジョーカーは少しも怯まなかった。他の生徒達とは違うその態度が、鴨志田の逆鱗に触れた。彼を見てみると、前にも自分に歯向かった生意気な生徒の事を思い出す。唯一の取り柄である足を壊してやったのに、彼はそれでも自分に屈服しなかった。

二人の間にある張りつめた空気を裂いたのは、高巻の不自然に明るい声だった。

「先生！この子、バイト先の後輩です」

それを聞いて鴨志田は眉を微かに持ち上げた。

「例の雑誌モデルのか？」

咄嗟に高巻が思いついた嘘だったが、ジョーカーはそれを鴨志田に信じさせるだけの見た目をしていた。

「はい。一緒に撮影するって言うのは聞いてたんですけど。君のシフト、もう決まったんだよね？」

高巻がジョーカーへと含みのある視線を向ける。ジョーカーはその意味を直ぐに理解した。助けるつもりが、逆に助けられてしまったようだ。ジョーカーはこくり、と頷いて彼女に話を合わせた。

「すみません先生、ちょっと打ち合わせがあつて。また今度お話聞かせてください」

彼女の言葉に気をよくして、鴨志田はふんと息を吐くと二人を解放した。

「バイト漬けもほどほどにな。学生の本分を忘れるなよ」

鴨志田が校舎二階の奥にある体育教官室へと姿を消した。彼の足音も聞こえなくなった所で、高巻は深い溜息を吐き出した。

「……ありがと。助かった」

「こちらこそ」

高巻は眼鏡の下に隠された彼の顔を覗き込もうとした。鴨志田の言っていた通り、彼は赤い目をしている。前髪が長いのも、眼鏡をかけているのも、それを隠す為ではないのだろうか。

「君、ほんとに見えない顔だね。一年にしても、君みたいな子が入ったらもつと噂になってそうだけど」

眼鏡のリムを押し上げながら、ジョーカーは彼女から顔を背けた。竜司に言われた、目立つから出歩くな、とはこの事だったのだろうか。羽も尻尾も隠して、他の生徒と同じ服装でいるのに、変装の努力が報われていない。

高巻のスマホがチャットの着信を告げる。彼女は画面を一瞥すると、ジョーカーへの追及を中断した。

「まあ、いいや。また会ったらお礼させて。友達待たせてるんだ。本当に助かったよ」

そのまま去ろうとする彼女を、ジョーカーが慌てて引き留めた。三島がいなくなってしまう以上、彼女に頼るしかない。

「ちょっと待って。坂本竜司って、知ってる？」

彼の名前を出した途端、高巻の表情から緊張が失せた。近寄りたいたい美少女、と言った雰囲気だったのに、急に砕けた態度になったのが分かる。

「竜司？え、君って、竜司の知り合い？」

彼女の豹変っぷりにジョーカーは面食らってしまった。親しい人間の名前を出されて、自分への警戒が薄れたのがありありと分かる。

まさか竜司がこんなに可愛い女子と知り合いだとは。自分には浮気するなと言っておきながら、許せない。

自分は他の男と寝ていたのに、ジョーカーは竜司が高巻に名前を知られていると言うだけで、彼の不貞を疑い始めていた。走り込みと言うのは嘘で、実は彼女と学校で何かやっていたから、毎日疲れた様子だったのでは、とまで発想を飛躍させてしまう。

だがジョーカーの心配を余所に、高巻は平然とした面持ちで告げた。
「知ってるも何も、中学の同級だけど」

彼女だけど、と言われなくて、ジョーカーは盛大に安堵の息を漏らした。

「どこにいるか、知らない？」

「チャットで聞いたら？繋がつてないの？私はID知らないけど」

その問いかけをジョーカーは違う意味で捉えた。

「繋がった事ならある。チャットつて？ID？」

スマホを持たないジョーカーにとって、誰かと繋がると言われてもそれしか思い浮かばなかった。身体を重ねたと言うだけで彼の居場所が分かるのならば苦労はしない。

ジョーカーが何を考えているかも知らずに、高巻は啞然とした。まさか今時、高校生にもなって彼はスマホを持たせてもらえていないのだろうか。親の干渉があつての事なら、過保護を通り過ぎていて気がする。

「今時スマホが無くてどうやって生きてんの……。まあ、人それぞれか。竜司なら、この時間は屋上にいると思う。連れてつてあげるね」

アルミの軽い扉を開くと、閉塞的な校舎内から抜け出して、頭上に青空が見えるようになった。扉に立ち入り禁止と書いてあつたからか、校舎内と違って人の気配がない。周りのビルに阻まれてはいるが、陰鬱な空気に支配されている校舎から解放されて、ジョーカーは少しだけ心が晴れるのを感じた。高巻の予想通り、竜司は屋上にいた。そこかしこに教室で余つた机が雨ざらしに置かれているのだが、その内の一つに腰かけている、見慣れた金髪の後ろ姿があつた。

ようやく竜司を見つげられて、ジョーカーは嬉しさから彼へと抱き付きそ

うになった。高巻がいなかったら、羽を生やして飛んで行っていただろう。尻尾が勝手に出ていないか心配になる程だ。

表情だけでもジョーカーが心底喜んでるのが分かる。高巻は彼につられて笑みを零した。

「良かったね、見つかった」

ジョーカーは頷くと、彼女に向かって輝かんばかりの微笑みを向けた。

「ありがとう。助かった」

その笑みに魅せられて、高巻は頭がぐらりと揺らぐのを感じた。鴨志田相手にも堂々と立ち向かつていた彼が、このように可愛らしい顔を出来てしまふのは卑怯だ。初対面なのに彼に惹きつけられそうになっている自分に気付いて、高巻は慌てて頭を振った。

ジョーカーは既に竜司の元へ向かい、彼と何やら親しげに話している。男の友情と言うのだろうか、彼らの間には誰も割つて入れない雰囲気があつた。竜司が笑っている姿を久しぶりに見た気がする。高巻は何となしに彼らを遠巻きに見つめていたが、自分も友人を待たせている事に気付くと、はっとして屋上から校舎内へと戻って行つた。せっかく彼に助けて貰つたのに、これでは志帆に会う時間が無くなってしまふ。高巻は急ぎ足で階段を下りて、一階の渡り廊下で待っている彼女の元へと向かった。

昼食のパンを食べていたら、いきなり背中体当たりされた。屋上の扉が開く音に気付かなかつたのは、考え事をしていたからだろうか。竜司は危うく喉を詰まらせそうになつた。

「だ、誰だよ！」

後ろを振り向いて確かめる。そこで満面の笑みを咲かせていたのは、まさに竜司が思い浮かべていた人物だった。秀尽学園の制服を身に着けていて、しかも髪は短くなっているし、眼鏡はかけているし、最初は誰だか分からなかった。

「は、え、ジョーカー？なんで学校にいるんだ？」

服装や髪型を変えるだけでなく、彼は羽と尻尾まで見事に隠していた。ジョーカーにそっくりな別人かと思ったが、至近距離で見せつけられる血と同じ色の瞳は、正しく夢魔の物だ。

ジョーカーは竜司に抱き付いたまま、嬉しそうに微笑んだ。

「竜司に会いに来た」

事も無げに言ってくれる。竜司は彼の行動力に舌を巻いてしまった。こんなに人間と同じ姿形をしているのでは、目立つから外に出るなどは言えない。毎日毎日家に閉じ込めっぱなしで可哀そうだな、と思っていたが、無駄な心配だったようだ。

「なんで俺がどこにいるか分かったんだ？」

近くにあった机に腰かけながら、ジョーカーが竜司の疑問に答える。

「学校の中うろろしてたら、助けてくれた人がいたんだ。三島と、高巻。竜司の知り合いだろ？」

竜司が二人の名前を聞いて、ああ、と軽く頷いた。ここで昼食を取っていると教えた記憶はないが、たまたま見かけていたのかもしれない。三島の事はあまり知らないが、高巻なら、自分の居場所を教えて欲しいと言われても、相手を無碍にはしないだろう。他の生徒だったら、不良に関わりたくない

逃げ出していたはずだ。高巻は、髪を金色にしてからも昔と変わらない付き合いを出来ている、数少ない相手だった。

竜司と会えて上機嫌だったジョーカーが、不意に真面目な目つきになった。「この学校、少し様子がおかしいな」

鋭い指摘を受けて、竜司は遂に腹をくくる時が来たのだと悟った。学校にまでやってきてくれた彼に、今更隠し事などしたくない。この学校がおかしいと言う事は、校舎内を少し歩けば分かる事だ。三島に会ったのなら、彼の怪我の理由も既に聞いているかもしれない。

残りのパンを口に詰め込むと、竜司は喉を鳴らしてそれを飲み込んだ。一息ついてから、ジョーカーへと向き直る。

「三島か高巻から、鴨志田の事は聞いたか？」

ジョーカーが険しい表情で頷いた。二人から話を聞くだけでなく、鴨志田とは直接会って話をしている。短いやり取りだったが、鴨志田がどんな人間か理解出来た気がする。

「あいつだよ。俺の足を壊したのは。俺、陸上部だったんだけど、あいつに目付けられて、部も潰されちゃった。鴨志田の挑発に乗った俺が悪いんだ。おふくろの事、馬鹿にされて、我慢が出来なくなっちゃって……。俺の脚も、正当防衛って事で片付けられた」

竜司の話を黙って聞いていたジョーカーが、強い憤りに理性を吞まれ、視界が眩んでしまった。赤い瞳の色がますます鮮やかに、前髪と眼鏡では隠せない輝きを帯びている。全身の毛穴がざわついて、今にも本来の悪魔の姿に戻ってしまいそうだった。

ジョーカーが情を感じさせない声音で呟いた。

「竜司には言ってなかったけど、俺が人間の精力を吸い尽したら、そいつは廃人になるんだ。普通、吸い尽す前に時間が経って、少しずつ元に戻っていくものだけど。別に、セックスまでする必要はない。スキルで動けなくして、一回のキスで全部吸い取ってやるだけ」

一際鋭い目つきになって、ジョーカーは竜司に問いかけた。

「鴨志田を終わらせてやるのか」

竜司が鴨志田に奪われた物は、余りにも大きすぎる。もし彼が望むのなら、間違った力の使い方をしてもいい。ジョーカーはそこまで覚悟をしていた。

しかしながら竜司は迷いもせず首を横に振った。

「今更、鴨志田を廃人にしたところで、俺は何も変わんねえよ。脚の怪我は一生モンだし、あいつがオフロを馬鹿にした事は取り消せねえし、俺を不良だって怖がってる奴らも、たぶんそのままだ」

竜司はそこまで言うと、少し気まずそうに頬を指で搔いた。

「復讐なんかの為に、お前が鴨志田とキスするとか絶対やだから。あんな奴の精力なんて食ったら、腹壊すぞ」

ジョーカーはそれを聞いてつい嘖き出してしまった。復讐なんて無意味だと言うかっこいい言葉よりも、鴨志田に嫉妬する言葉の方が、感情が籠っていたような気がする。竜司が望まないのなら、鴨志田の様な男と接触するな、自分も絶対に嫌だ。

肩を揺らして控え目に笑うジョーカーには自分の考えなど全てを見透かされているようで、竜司は気恥ずかしくなってしまう。復讐に興味がない事は本心だが、ジョーカーが手を汚す、しかも鴨志田とキスをして、となると、絶対にそんな手段は選べない。むしろ、あの男がジョーカーに手を出す

と言うのなら、どんな汚い手を使ってでも止めようと思えるが。

ひとしきり笑って満足したジョーカーが、竜司へと試すような目を向けた。「やられっぱなしでいいのか？」

竜司の目つきが険しくなる。確かに、一矢報いてやりたい気持ちはある。鴨志田にも、何もかもが自分の思う通りに行くわけではないと分らせてやりたい。

今まで漫然と走り込みを続けてきたが、ジョーカーに発破をかけられてしまった。現役だった頃にまで身体を戻すには、まさしく血反吐を吐く程のトレーニングが必要になるだろう。だがジョーカーと出会ってから、明確に目標が見えた気がする。

「俺らの陸上部、バレー部顧問の鴨志田が目の敵にするくらい、いい成績残してたんだぜ。部が無くなった所為で大会には出られなくなっちゃったけど、復活すればまた大会に出られるはずだ。そこでまたいい成績とって、鴨志田を見返してやる」

そこに行きつくまでの障害が余りにも多く、竜司は話しながら気が遠くなりそうだった。自分の身体を作り直すだけでなく、再び結束させなければならぬ陸上部の部員たちはまだ自分を憎んでいて、しかも承認を与える筈の教師は全員が鴨志田の味方だ。もしも本当に陸上部を復活させられたなら、まさしく奇跡だろう。

竜司の宣言を聞いて、ジョーカーはうん、と頷いた。竜司は鴨志田に奪われた物を取り返す決意が出来たようだ。それなら、自分がやる事は決まっている。

「お前ならやれるよ。俺もついているから。お前の邪魔をする人間がいたら、

俺がどうにかしてやる」

この上なく頼りになる味方だ。竜司は嬉しいと思う反面、彼が何をしてくるか、少し不安に思ってしまった。彼ならば人の心を奪って操るなど、朝飯前だろう。彼に魅了された元陸上部の部員たちや、教師たちが、彼の意のままに動く姿が目には浮かんでしまう。

苦笑いを浮かべる竜司へと、ジョーカーが羽と尻尾を生やしながら飛びついた。感情が昂って、悪魔の象徴であるそれらを隠しきれなくなる。青空の下、悪魔の羽を気持ち良さそうに大きく拡げながら、ジョーカーは下心に満ち溢れた妖しい笑みを浮かべた。

「そうと決まったら、これからは毎日、竜司からたっぷり精力を貰わないとな。この恰好でいるの、思ってたより力を使うみたいだ。定期的に補充しないと、学校で悪魔の恰好に戻りそう」

フェンスに囲まれているとは言え一応屋外であるにも関わらず、ジョーカーは竜司のズボンをずりりと脱がせ、彼の性器に手をかけた。もう行為自体はとつくに慣れているが、場所が学校である事に対し、竜司は顔が一気に熱くなってしまった。しかも、今のジョーカーは、秀尽学園の生徒の姿をしている。短い黒髪も、黒縁の大きな眼鏡も、キャラではないのに彼にとっても似合っていて、いつもの凄みのある美人とは違う可愛さがあった。同級生である彼といやらしい行為に及ぼうとしている気分になってしまい、認めたくなかったが、竜司は非常にそそられてしまった。今のジョーカーを見てみると、成人向けの雑誌で、制服を着た女性がやたらと好まれる理由が分かってしまう。

びたりと身を寄せたジョーカーが、器用な手つきで自身の物を擦り上げて

いる。竜司は眼鏡越しに彼の浮かべた恍惚の表情に見惚れてしまった。大人しそうな見た目と、手つきの淫猥さとの落差が堪らない。今からこの彼を抱けるのなら、竜司はここがどこであるかなど、次第にどうでも良くなってしまった。

快感に流されかけていた竜司が、ふとある事に気が付いた。

「ちよ、つと待て。お前、毎日って言った？まさか今日だけじゃなくて、これからずっと学校に来るつもりじゃ……」

ジョーカーは何を今更、と言わんばかりに微笑んだ。彼を一人で鴨志田に立ち向かわせるなど危険な事、出来る筈がない。いざとなったらスキルを使って、竜司に危害を加えようとする人間を全員、洗脳してやるつもりでいた。「転校生、って奴だな。任せろ、ちゃんと漫画で勉強したから、学校の事なら知ってる」

竜司は思わず天を仰いだ。まさかこれからは毎日、学校でも彼に振り回されるのか。陸上をする体力が放課後まで残っていたらいいのだが。

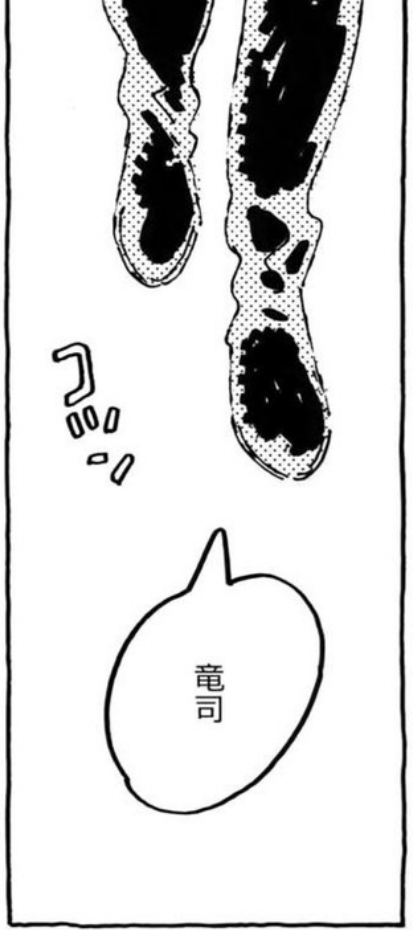
しかし竜司は同時に、彼にならどんなに振り回されても別に構わないと思ってしまった。

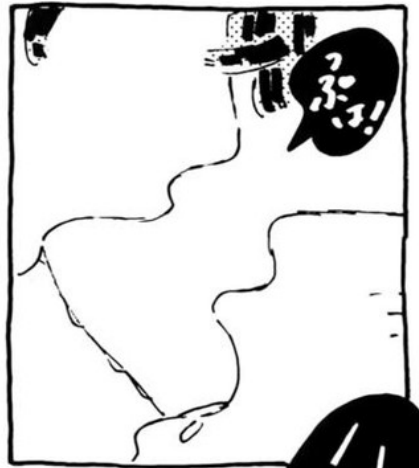
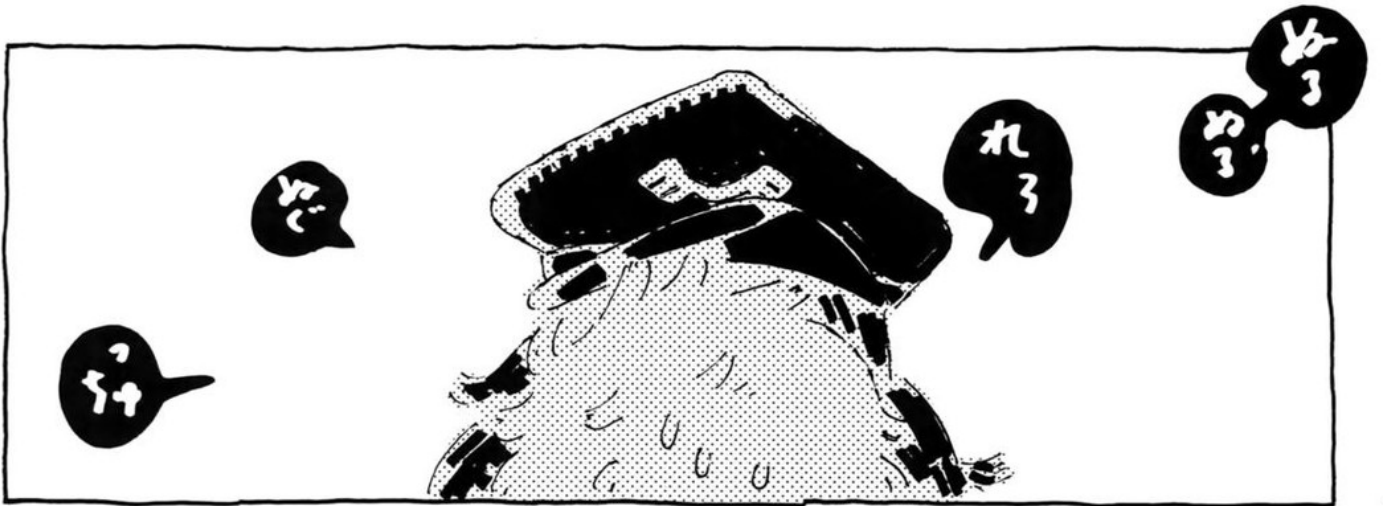
我ながら単純だと思うが、陸上を始める決意を固められたのは、ジョーカーの一言が大きな後押しになったからだ。彼は、脚を怪我して仲間を失い、腐っていた自分に対して、好きだと言ってくれた。彼がいなかったら、走り込みを途中で止めて、ただの不良として残りの高校生活を過ごしていただろう。今度は埃の積もった昔のトロフィーではなく、今の自分を見せて、カッコいいと言わせたい。竜司は彼と出会ってやっと、長い悪夢から覚めたように感じていた。

ジョーカーという悪魔 …スーパーネコちゃんマン

夢を見た



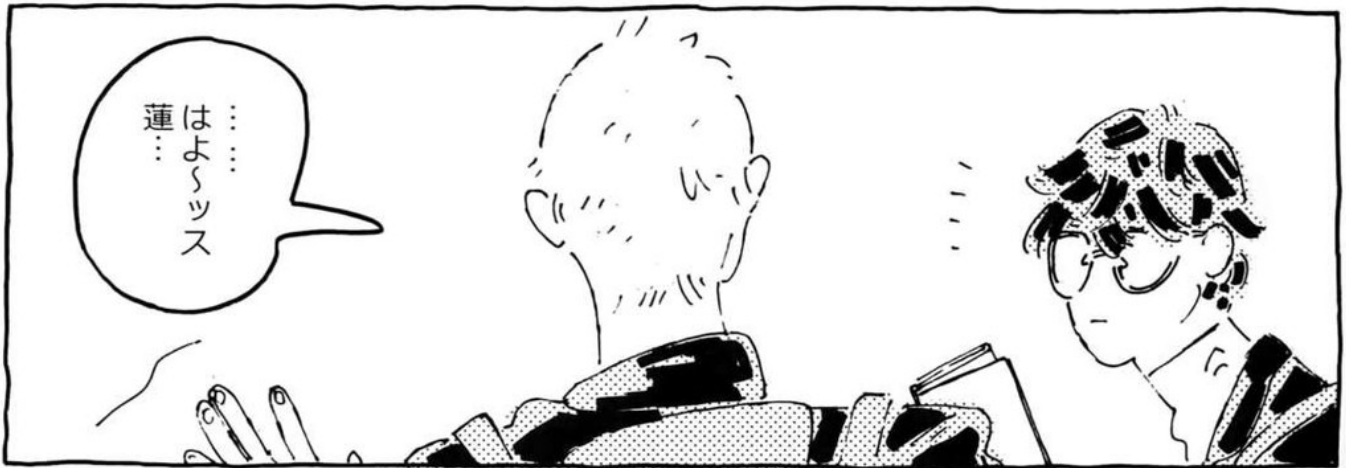
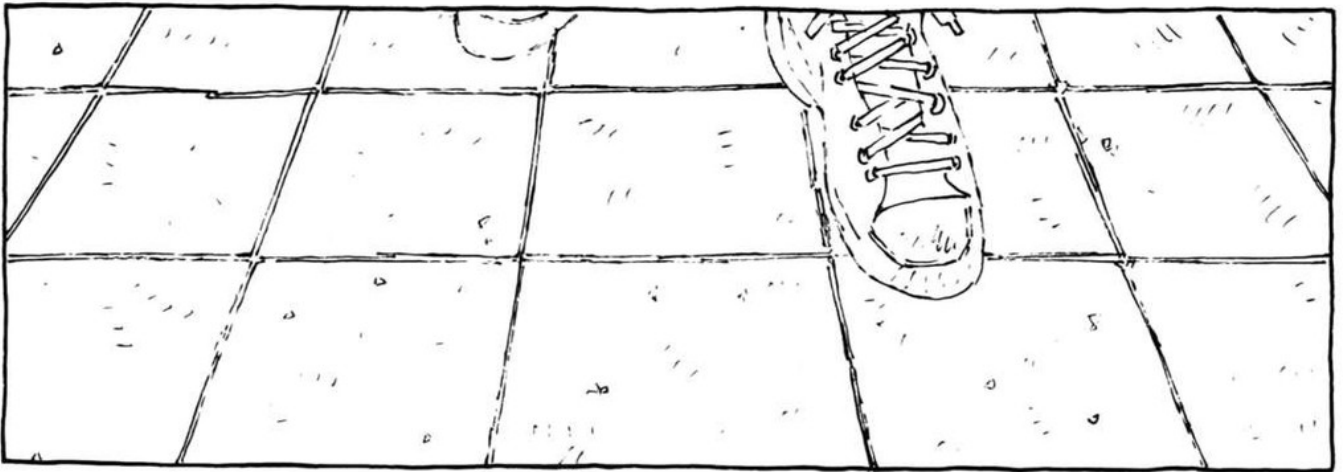


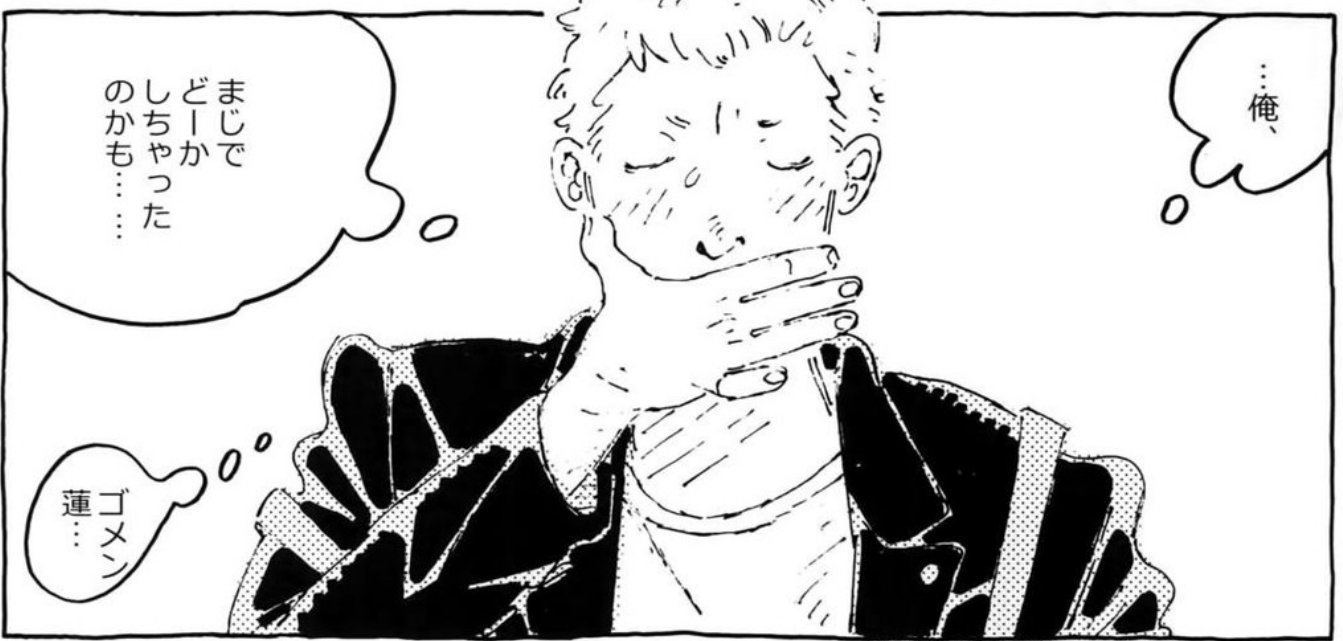
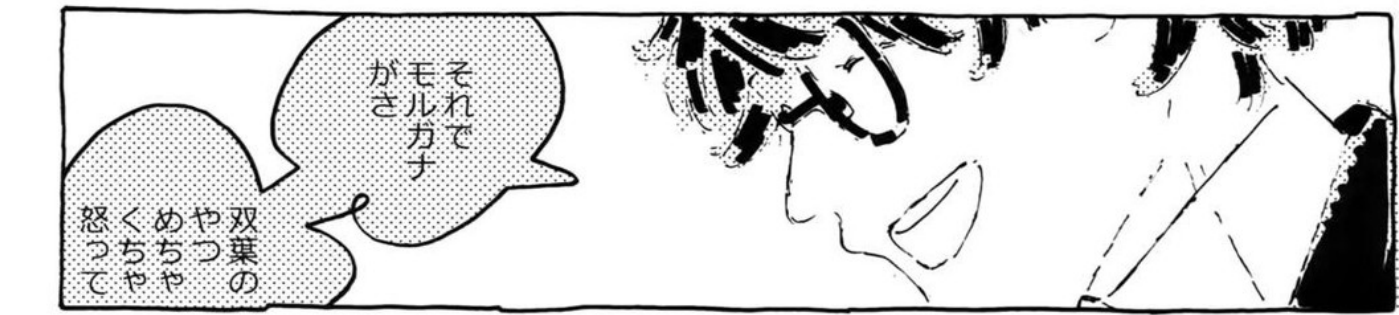
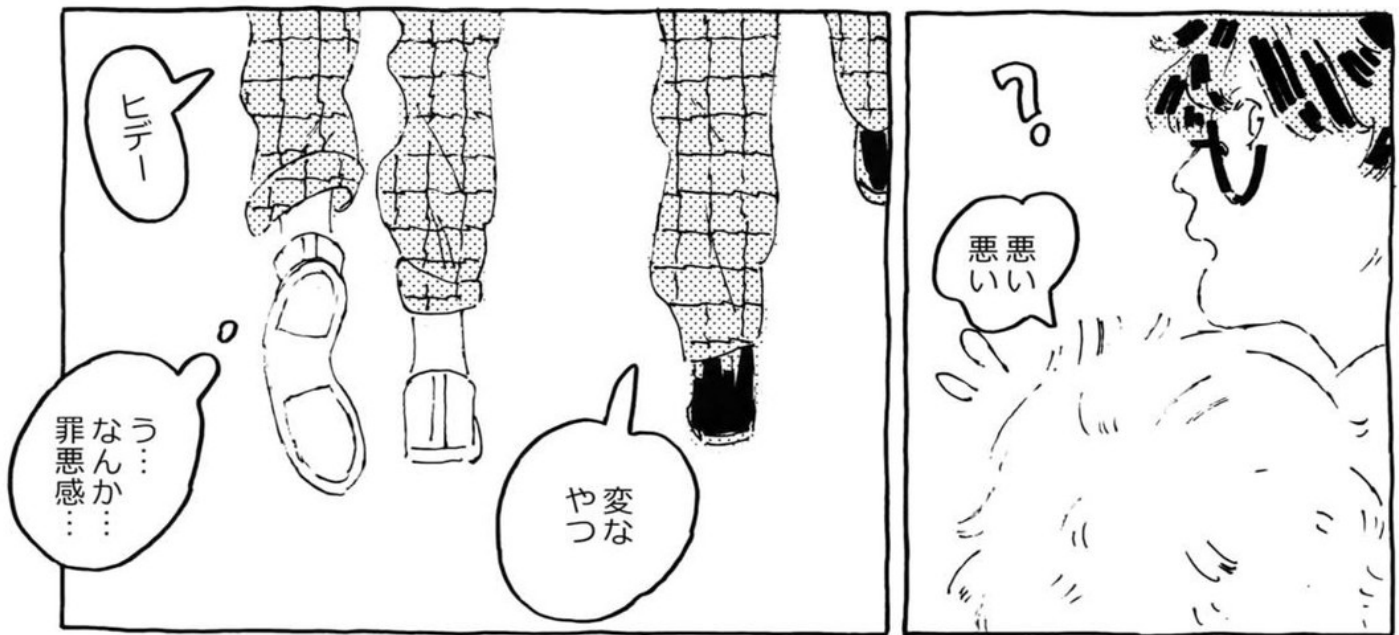


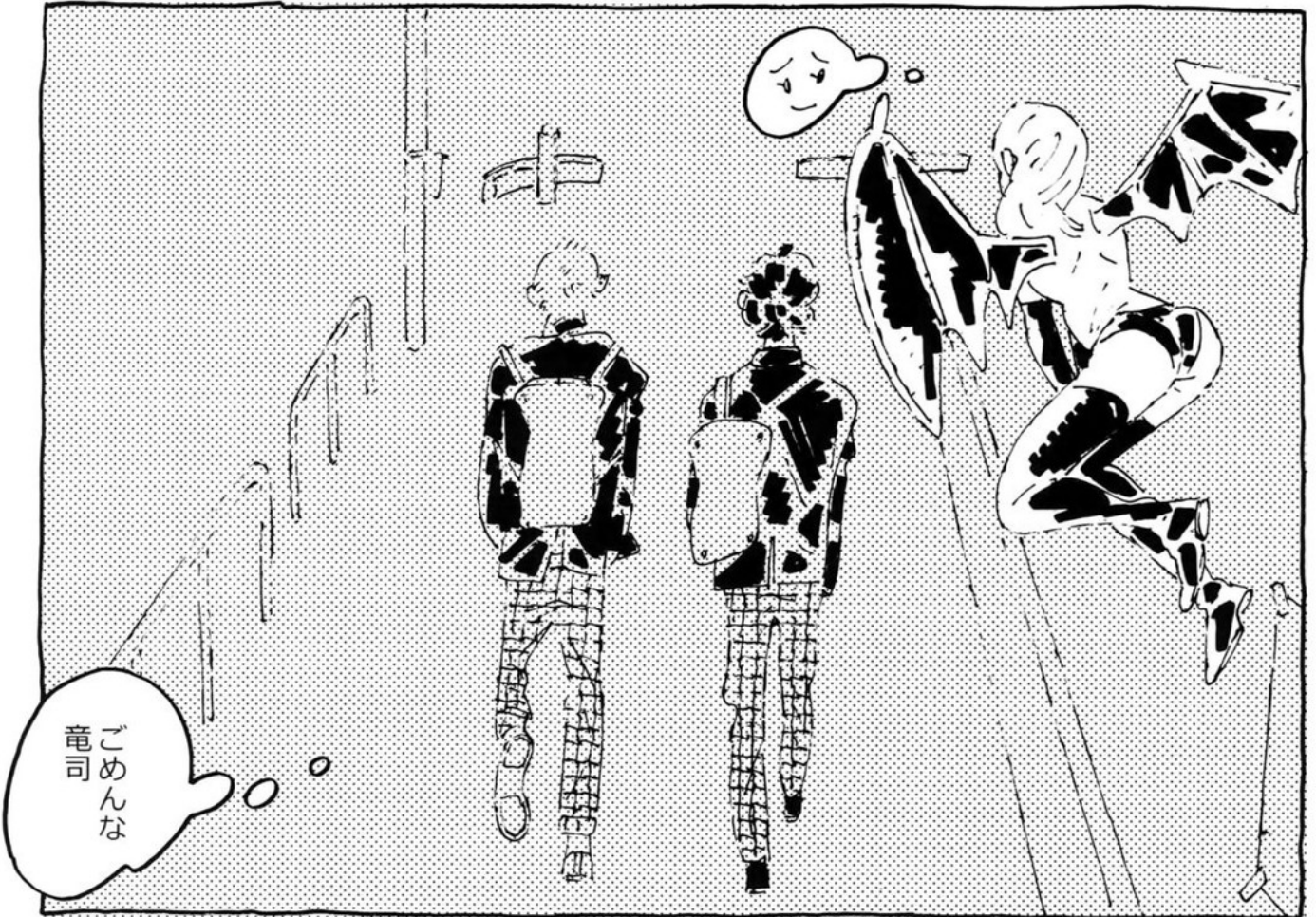
スキル
にでも
かかった
みてーな...











コッパちゃん
夢魔
とミミの

persona5 ryuji*protagonist
Succubus-cop fanzine

SPECIAL GUEST ♡



♡あとかき♡

こんにちは桐下です。今回は夢魔でコップな竜主合同誌です!!!
何気に人生初のパロ本でした…コップ衣装知らない方の為に説明すると
ペルソナ5ダンシングスターナイトのDLCで女装衣装が追加されて、主人公くんの
女装がこのお仕置きコップってやつだったんですね…。それに別途夢魔の羽根という
アクセサリアイテムがあったのでそれを組み合わせて生まれたパロネタです!!
なんのこっちゃって感じですが主人公くんが夢魔なのもコップちゃんなのも似合いすぎて
自然と萌えてしまったので本が出ました!!
きっかけをくれたkokokisuさん、ご協力いただいたゲスト様には本当に感謝です♥
読んで頂いた方にも、この本がなにか新しい扉を開くきっかけになれば幸いです。
またなんか竜主かきたいので好きな方はまた是非お付き合いください~!

桐下悠司

こんにちは!!夢魔コップちゃんと竜司のお話に興味を持っていただけて嬉しいです!
ダンスのゲームでお仕置きコップ衣装+夢魔の羽と言う奇跡の組み合わせが
出来た事が発端だったのですがまさか本になるとは……。
悪魔の羽じゃなく夢魔の羽だったんです公式で!
そんな夢魔ちゃんと竜司と一緒にダンスさせられるとかもう妄想するしかないですよ。
今回ほんとうに素敵な沢山のゲストさんたちに参加して貰えてめちゃくちゃ幸せです……。
魅力的なゲストさんたちにそれぞれの世界観の夢魔コップちゃん表現していただいて!!
まるでジャ○ブ誌上で実現したラブコメのアンソロジーのようです……。
この場を借りてお礼を言わせていただきます!本当にありがとうございました!!

kokokisu

コッパちゃん と まま の 夢魔

persona5 ryuji*protagonist
Succubus-cop fanzine

奥付

発行日 2019.1.27 アナザーコントロール10
発行人 downbeat 桐下悠司/under the bed kokokisu
印刷 栄光印刷さま

連絡先 kirimotoyuuji3796@gmail.com



GUEST

いいづ

うんうん

生地

さわ

スーパーネコちゃんマン

ハトムギ

PROMOTER

桐下悠司

kokokisu